



法政大学現代福祉学部

2023年度 海外研修報告書

A団（2023年8月26日～9月3日）

団長・副団長挨拶

2023年度 海外研修団長 飯室 遥香

副団長 志牟田 美佳

今年度の海外研修A団団長、副団長を務めさせていただきました、飯室と志牟田です。私たち19名の研修生は、事前学習とガイダンスを経て8月26日から9月3日の移動日を含めると9日間、スウェーデンを訪問しました。4年ぶりの海外研修では、変則的にA団、B団と大きく2つの旅団に分かれた他、例年だと2年生のみが研修に参加することが出来ましたが、今年度は我々3年生や4年生、もちろん2年生と合同で研修を行いました。A団とB団ではメンバー、そして研修内容も異なっており、A団では福祉分野の中でも心理系の分野の訪問先が多いことが特徴的となっていました。この報告書を通じて私たちの学びや交流、海外研修の様子などを伝えられたらと思います。

私たちは6月頃からこれから向かうスウェーデンのことを学ぶべく、4グループに分かれてそれぞれのグループが関心のあるテーマについて事前学習を行いました。それぞれのテーマに沿ってスウェーデンの制度や文化について調べ、日本と比較しながらA団とB団合同でグループ発表を行い、その気付きや考察、疑問点について全体で共有しました。他にも通訳の方からお話を聞き、事前に添乗員さんから危機管理についての心構えや、スウェーデンに渡航するにあたって必要な知識なども学びました。こういった事前学習のおかげで研修を安全に、かつ実りの多いものにすることが出来たのではないかと思います。

例年とは違いドバイを経由してのスウェーデン、その道のりは長く感じましたが、現地に着いてからはあっという間の9日間でした。貸し切りバスだけでなく、公共交通機関も使いながら研修先へ向かい、ストックホルムで暮らす人々の生活を身近に感じながら研修に参加することが出来ました。研修先では日本にいただけでは学ぶことが出来なかった価値観やスウェーデン独自のFikaの文化に触れ、事前学習で学んだこと以上の知識を得ることが出来る貴重な機会となっていました。無論海外研修では上手くいったことばかりだけでなく、現地の人たちとの言語の壁、専門的な知識の理解の難しさなど、それぞれに課題と感じ、悔いに残ることも多くあったと思います。ですが、この課題さえも、我々の今後の人生に役立つ資源になったのではないのでしょうか。決して安くはない金額の海外研修となっていました。研修生それぞれにとってこのかかった費用以上の大切な学びを得ることが出来た、そんな一週間となりました。

この報告書を読んでくださっている皆さんにとって、何か1つでも心に残るようなものがあれば幸いです。

最後に、昨今の海外情勢やコロナなど、難しい状況の中研修の実現と成功にご尽力して下さった現地の通訳の方、旅行代理店の皆様、現代福祉学部の事務員の方々や、学部の先生方、その他この海外研修に関わってくださった全ての方々に、この場をお借りして研修生一同、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



2023年度 現代福祉学部 海外研修行程表

	日時		内容
0日目	8/26	20:30	羽田空港集合
1日目	8/27	AM	ドバイ乗り換え
		PM	ストックホルム着 バスでホテルへ
2日目	8/28	AM	行政オフィス訪問
		PM	プレスクール訪問
3日目	8/29	AM	小児病棟訪問
		15:00-16:00	医療センターBUPの臨床心理士を訪問
		16:45-21:00	ストックホルム大学の学生と交流&食事
4日目	8/30		自由行動
5日目	8/31	AM	ハンマルビー・ショースタッド訪問(都市開発)
		PM	小学校訪問
6日目	9/1	AM	オンラインカウンセリングの臨床心理士訪問
		昼食	障害者が働く施設にて昼食
		PM	障害者向けの高校(中高一貫校)訪問
7日目	9/2	15:25	ストックホルム出発
8日目	9/3	17:35	成田空港着



2023年度現代福祉学部海外研修報告書 目次

団長・副団長挨拶	01
研修参加メンバーの紹介	02
研修行程表	04

<グループ報告>

●視察先報告～スウェーデン～

スウェーデンの概要	06
ティレソ・コミュン(Tyresö kommun)	08
ヴァッテンユーレット・プレスクール(Förskolan Vattenhjulet)	09
アストリッド・リンドグレン小児病院PRC (Astrid Lindgrens Childrens Hospital, Pedagogiskt Resurscentrum-PRC)	11
青年精神科医療センター(Barn-och Ungdomspsykiatri-BUP)	13
サステナブルな街 ハンマルビー・ショースタッド(Hammarby sjöstad)	15
移民の多い地域のフッスビーゴージュスコーラン小中学校視察(Husbygårdsskolan)	17
オンライン心理カウンセリングサービス (Din psykolog)	20
少人数制特別支援学校 イカスス・フリースクール (Ikasus grunskola och gymnasium)	22

●グループテーマの事前学習

1 班・スウェーデンの福祉行政と障害者雇用	25
2 班・スウェーデンの障害者教育と都市開発	28
3 班・スウェーデンの子育て制度と心理職及び医療制度	31
4 班・スウェーデンの小学校と病児教育	33

●学生交流会

36

<個人報告>

41

7 日間の記録	61
教員挨拶	69

スウェーデンの概要

飯室 遥香

1. 概要

正式名称：Konungariket Sverige（コーヌンガリーケト・スヴェリエ）

面積：約45万km²（日本の約1.2倍）

首都：Stockholm（ストックホルム）

言語：スウェーデン語

通貨：スウェーデン・クローナ

2. 歴史

年月	略史
800～1050年頃	ヴァイキング時代
1379年	カルマル同盟によりデンマーク王がスウェーデン王として即位
1523年	グスタフ1世即位 デンマークより独立
1630～1648年	グスタフ2世アドルフ、ドイツ30年戦争に介入 ウエストファリア条約で大国としての地位を確立
1814年	キール平和条約締結 以後非同盟・中立政策へ向かう
1818年	現在にも続くベルナドッテ王家が始まる
1868年	日本との本格的な外交関係開始
1946年	国連加盟
1995年	欧州連合（EU）加盟

3. 伝統

スウェーデンの伝統の多くは、四季の移り変わりと密接に関係している。冬には多くのキャンドルを灯し、夏には野外での行事が多く開催される。スウェーデン人が大切にしている伝統には、ザリガニパーティーや夏至祭、クリスマスなどのかなり有名で多くの国が行う伝統行事から、スウェーデンに約50万人いるイスラム教徒の祝祭日であるラマダンのような宗教色の濃い伝統行事まであり、民族・文化が混在する中立国ならではの独自の文化が発展している。また、福音ルーテル教会が多数派となっているが、現在は無宗教者が増えている。（写真1はザリガニパーティーの写真）



1. ザリガニパーティーで並べられたザリガニ

4. 食文化

スウェーデンで取れる食材、特に新鮮な魚や、自然のもたらす果物・野菜を中心に独創的な料理が多く存在する。代表的なものは世界一臭い食べ物と言われるニシンの缶詰め、シュールストレミングだ。またスウェーデンでは、自然享受権という独特な権利があり、誰でも野イチゴやアンズ茸、その他の自然の産物を摘むことができるという。歴史的に見て、スウェーデンの食文化は食料を蓄えておく必要性から成り立ったものが多い。新鮮なベリーはジャムに、野菜は酢漬けにする。キノコは乾燥させ、肉や魚は燻製に。塩漬け、発酵、マリネなど、貯蔵するための加工方法は様々である。また余談になるがスウェーデンは物価、特に外食における料金が高く、お酒なども飲もうとするとかなりの値段になる。そこでスウェーデンの人々は友人たちと外食、特にお酒を飲みに行くときには、まず友人の自宅でお腹を満たしてから、外食へ行くことが多いという話もあるので、スウェーデンの食文化には興味を持つことで、より効率的に、かつ楽しくスウェーデンを過ごすことができるだろう。

参考文献

- ・ 外務省ホームページ(閲覧日：2023年11月19日) <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/sweden/data.html>
- ・ スウェーデン観光文化センター(閲覧日：2023年11月19日) <http://letsgo-sweden.com/>
- ・ フリー百科事典 ウィキペディア日本語版(閲覧日：2023年11月19日)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ティレス・コミュニケーション(Tyresö kommun)

筒井 くるみ

1. 概要

Tyresö kommunは直訳すると「ティレス自治体」、首都ストックホルム県の中に位置するティレス市である。ティレス市の人口は約25000人で美しい自然で知られている。私たちはティレス市の市役所に訪問し、そこで市が取り組んでいる福祉政策について話を伺った。

2. 祉政策について

まず訪問介護についてである。訪問介護サービスにおいて、約70%が公営、残りの約30%が民営である。この市役所で行なっているサービスの職員の人数の割合としては2100人に対して450人が担当しており、全員が公務員である。対象者は発達障害や自閉症スペクトラム障害、高次脳機能障害、先天的な慢性重度障害などであり、自立サポートを中心に行なっている。各家庭にアラームがあり、そのアラームを使って職員を呼ぶことができるようになっている。もちろん介護している家族へのショートステイなどのサービスもある。

次に高齢者支援へのITの導入である。市では高齢者にスマートフォンの使い方を教えコンタクトが容易に取れるようにし、孤立防止に取り組んでいる。また支援者の家族に対して相談員サービスがあり、家族に対してセミナーの日を設けることでケアグループ的な形式をとった支援を実施している。

法律についてはLSS法と福祉サービス法で支援対象者が区別されておりLSS法は重度障害者のみ、福祉サービス法では障害者と高齢者が対象である。

課題として人材不足と疾病休暇、つまりは休職の多さが挙げられている。後者については休憩時間を増やすことやマインドフルネスにより対策を講じている。これらについて介護職は重要だと考えているようだった。

ちなみに、介護施設について、トイレに日本のウォシュレットを導入する話があがっているが便利さの反面、その人のできることを奪ってしまうのではないかと懸念もされており賛否両論である。

3. 考察

スウェーデンと日本の福祉について大きな違いは公営か民営かであろう。公営での利点を挙げるとするならばサービスの質の均質化で、民営では会社ごとの差が出るところが解消されと考える。福祉サービスの公営化を日本に取り入れることを考えるとまず出てくる課題は今までに存在していた企業法人の扱いで、スウェーデンの政策をそのまま運用する場合福祉職はみな公務員の扱いになるだろう。しかしそうすることは難しいのが現状であり、都道府県や市町村が民営の会社に業務委託をする場合それは公営と言えるのかが問題となってくる。スウェーデンに限らず、福祉が進んでいる国々の取り組みを参考にしながら日本の制度や文化に合う方法を見つけることが必要だ。

ヴァッテンユーレット・プレスクール

(Förskolan Vattenhjulet)

鷺谷 あかり 平野 暖佳

1. プレスクールの概要

プレスクールとは、未就学児の保育施設のことを指す。今回訪問した施設はティレソ市中心部のアクヴァリエゲンにあるプレスクールである。ティレソでは現在人口の増加に伴い、多くのプレスクールの建設する必要性が高まっている。私たちが今回訪問したプレスクールも、2021年9月に開設された比較的新しい施設である。

今回訪問した施設には、子どもが31名、教師が150名在籍している。1～3才は12名、3～5才は13～15名ほどの割合で構成されている。大きな施設であるため、校長先生は1人だけであり、そのおかげで他の先生と校長先生のコミュニケーションや話し合いの決定が早くできるという利点がある。基本的に4～6人の子どもに対し1人の先生が付くようになっているが、これはできるだけ一人一人の子どもをよく観察するために、先生も少人数で子どもに対応するようにしているそうだ。子どもがプレスクールにいられる時間は6:30～18:30までだが、働いている親のニーズを含めると、子どもの多くは7:00～17:00までの滞在が多い。月謝は1万5千円ほどだが、親の所得によって変動がある。2週間ごとに新しい入学生が入ってくるが、入学式がないため、最初は親と子どもがともにプレスクールで過ごし、子どもが慣れてきた4日目あたりから、親は子どもを1人で過ごさせている。

2. 教育方針

このプレスクールでは、先生がサポートしながら子どもたちの興味関心を探求していくことを大切にしている。例えば「カタツムリは石を食べるのか」という研究は、過去に子どもたちが興味をもち実際に行なわれたものだ。探求活動において最も重視されるのは過程である「プロセス」である。先生は子どもたちの興味あるものに沿ってカリキュラムを作成する。

カタツムリの研究では、まず園庭に生息しているカタツムリを教室内で飼育することにした。そこで子どもがカタツムリに石をあげてみたが、カタツムリは食べなかった。この経験から子どもたちはカタツムリが石を食べないことを学んだのである。けれども、何を食べるのか新たな疑問が生まれた。そこで先生はカタツムリの食事シーンの動画を用いて子どもの学びをサポートした。同時に「どうやって食べるのか」「口はどのような形か」など人とは異なるカタツムリの体の構造について調べ、この調べ学習を通して体の部位名を学ぶ、飼育しているカタツムリを観察して絵を描く、朝の会で先生がカタツムリの話をする、殻の形から図形を考えるなど、広い視点から子どもの興味関心を引き伸ばした。これらの子どもたちの活動は写真に残し子どもと共有することで、自分たちの取り組み

を思い出してもらいながら、研究を進めていった。最終的に、数日間自然から借りたカタツムリを自然に帰し、私たちのものではないことも子どもたちは学習したという。

先生は、算数、自然科学、言語、美術、IT、創作活動を研究のカリキュラムに含めながら、子どもたちを導いている。またカリキュラムの中で、子どもたちが他の子どもの意見を聞くことを大切に、社会参加したくなるように「楽しい学び」を重視している。

3. 障害をもつ子どものサポート

障害をもつ子どもが入学すると、コミュン（市）の特別教育チームから先生が派遣されることで、障害をもつ子ども及びプレスクールの先生方をサポートする体制が整えられている。さらに、このプレスクールでは発達障害の子も遊びや活動に加わりやすいように、日常的にボディーランゲージを用いたサインを使用している。加えて、大人数が苦手な子どもがいれば少人数の学習に切り替える、大人数での食事が苦手な場合には別の部屋で食べるなど、一人一人の子どもの特性に応じて臨機応変に対応している。

4. 感想

今回プレスクールを訪問して、日本の幼稚園と比べた教育方針の違いについては目を見張るものであった。訪問した時の最初の印象として、どの部屋も窓が低い位置に取り付けられているという点に着目したが、施設の先生の話では、子どもが外の様子を見て、自分のやりたいことや疑問に思ったことを見つけやすいようにわざと低く取り付けられているらしい。この話を聞いて、就学前から子どもに自分の頭で考えさせようとするプレスクールの方針を感じさせられた。スウェーデンでは自立

（律）の精神が大切にされているという話をよく聞くが、それはこのプレスクールで培われた自己決定の力が関係しているのだろう。先生は子どもたちに“教える”というより“一緒に学ぶ”という姿勢を大切にされていて、子どもから何か疑問を質問されても答えず、一緒に調べて子どもに考えさせている。さらに手助けが必要だと判断した場合も、勝手には手伝わず、「手伝っても良いかな？」と聞くようにしているそうだ。

この自己決定を大切にする教育方針は、子どもの精神を豊かにするだけでなく、インクルーシブ教育にも貢献しているように感じた。日本の文化の集団意識の強固さは美德ではあるが、ことインクルーシブ教育においては弊害であると常々感じている。それに対してスウェーデンの教育は、自由意思を尊重し、自分で選択する機会を多く与えているという点で、インクルーシブ教育の導入のしやすさに貢献しているように感じた。

アストリッド・リンドグレン小児病院PRC (Astrid Lindgrens Childrens Hospital, Pedagogiskt Resurscentrum-PRC)

大沢 彩夏 土肥 ほの花

1. 概要

アストリッド・リンドグレン小児病院は、世界的な医学教育研究機関であるカロリンスカ大学に附置されたカロリンスカ大学病院に組み込まれる形で設置されている。病院の運営はストックホルム県からの予算に加えて、アストリッド・リンドグレン小児病院財団による基金のほか、個人・企業からの寄付によって実施されており、充実した予算が確保されている。このためストックホルム県内においてもスタッフ数・設備面の双方が高いレベルで維持されており、スウェーデン国内でもより先進的な医療体制を整えている。

2. 取り組み

アストリッド・リンドグレン小児病院では、プレイセラピーとして入院して治療を受ける子供の不安を軽減し、治療への意欲を起こさせるために遊戯を用いている。その専門職をホスピタル・プレイ・スペシャリスト (HPS) またはチャイルド・ライフ・スペシャリスト (CLS) という。ふつうはプレイ・スペシャリストと呼ばれている。視察ではアストリッド・リンドグレン小児病院で実際にプレイ・スペシャリストとして働いている方からお話を伺うことが出来た。

プレイセラピーは子供たちの生活の中心であり、遊びや創造的な活動を通して自分たちの経験を理解し、現実と向き合うことが出来るようになる。子供が実際に受ける治療内容を子供自身に理解してもらうために、実際に治療方法そのものを真似てみせ、最終的に子供自身に治療方法を人形などに真似て施してもらう。他にも具体的にどのような技術が使われるのか、どのような器具が使われるのかを実際にみせたりする。これらを通して、子供自身のやり方を尊重し、よく聞いてあげ、そして時間をかけて子供への説明に努めている。視察の時に絆創膏がたくさん貼られている人形や疾患がある人形を何体か見かけた。様々な人種の人形や動物の人形があり、スウェーデンでは多様性が尊重されていることを実感した。

また、思春期以降の患者への支援では、彼らが無気なく集まっていられるようなスペースがあり、そこにはゲーム機や音楽ができる専用の部屋などもあり病院で治療中であっても自分の日常を尊重できるような空間づくりがされていた。また、そのようなスペースで思春期以降の患者同士が交流することで、自分自身のことについての発信や経験の共有などにつながっていた。

3. 考察

視察を通して、この病院の小児科では子どもの権利を保障した子ども主体の治療を行っている印象を受けた。入院中も教育を受ける権利が保障されるよう院内学級を設置したり、自分に合った環境で過ごせる権利を保障するために、プレイルームは子どもの体調に合わせた部屋を用意したり、ストレスとなる刺激が少ない部屋を用意したりしている。また、認知発達レベルを考慮して絵本や人形で治療を説明したり、治療説明を親と子どもの同席で行うことで隠し事のない正しい情報を子どもに提供したりと、子どもの知る権利を守り、それによって子どもが治療について自分で考えて選択できるようになっている。幼い子どもの頭では病気や治療について理解するのは難しいとみなされて、きちんとした説明がなされないまま親の意思によって行動させられる可能性があるが、ここでは子どもが理解できるもので説明を行い、子どもの意思によって治療を受けられるようなサポートがされているところに感銘を受けた。子どもの権利を保障した子ども主体の治療を行うための抜かりのない設備やスタッフの方の対応が、子どもが安心して病院で過ごせる環境を作り出しているのだと感じた。

また、病気の子どもの抱える家族に対しても支援を行っていて、病院の隣にあるホテルの部屋を貸し出しているという支援が特に印象に残っている。家が遠かったり、子どもが小さかったりすると病院に寝泊まりする家族がいる。しかし、病院で貸し出される簡易ベッドは狭かったり硬かったりと質の良い睡眠をとるには向いていない。子どもと一緒に病気に向き合うことは身体に应えるものであり、十分な休息がないと家族まで体調を崩しかねない。こういう時に病院近くの部屋を借りられると、子どもが何かあったらすぐに駆け付けられるし、十分な休息もとることができて、家族も子も体調不調になるという事態を回避できる。そのため、病院の隣にあるホテルを貸し出すという支援には大変魅力を感じた。

病気の子どもへの対応や家族へのサポート、充実した小児科の病院設備についてのお話を伺い、アストリッド・リンドグレン小児病院の魅力や、日本とスウェーデンの子ども対応の違いなど様々なことを学ばせていただき大変勉強になった。

参考文献

- ・石川衣紀・田部絢子・内藤千尋・石井智也・能田昂・柴田真緒・高橋智(2017). スウェーデンにおける病院内保育とホスピタルプレイセラピー：カロリンスカ大学病院アストリッド・リンドグレン子ども病院の調査を中心に. 東京学芸大学紀要, 68(2), 115-124.
- ・About Karolinska. Karolinska University Hospital (閲覧日：2023年11月24日) [About us - Karolinska University Hospital \(karolinskahospital.com\)](https://www.karolinskahospital.com/en/about-us).
- ・Hospital Play therapy and Preparation Techniques in Sweden (スウェーデンにおける病院でのプレイセラピーとプレパレーション技術) (閲覧日：2023年11月24日)

青年精神科医療センター(Barn-och Ungdomspsykiatri-BUP)

大橋 真奈

1. 概要

BUPは、ストックホルムの県立青年精神科医療センターである。対象は2～18歳の男女であり、患者は無料で治療を受けることができる。スタッフは20名ほどで、小児精神科医、臨床心理士、医療看護師などが勤務している。職員は1日に2～3名の患者を対応する事が多い。BUPに来院する患者は重度の症状を持っているケースが多いため、他の施設の職員に比べ、1日の対応数は減らしているとのことだった。精神障害を持つ青少年に対し、検査、診断、治療、支援、カウンセリングを行う。電話での緊急相談も行っており、患者が危機を感じた際は24時間電話をかけることができる。

2. 提供する治療

BUPではカウンセリング、心理教育的介入、薬物治療、グループ治療、家族への介入、および行動訓練を伴う心理的治療を提供している。また、心理療法の1つであるDialectical Behavior Therapy (DBT) の実践を行っている。DBTのプログラムでは、患者は週に一度個人のカウンセリングに通い、週に一度グループの活動に参加する。週に2～3回の通院を最低1年半行う。患者はあらかじめ、危機を感じた際に行うことを心理士と共に決めておき、危機が発生した際はその行動を取ることで衝動的な自傷や自殺を防ぐ。しかし、あらかじめ設定した行動を取ることができない場合は、BUPに電話をかけ、心理士と話すこともできる。

3. DBTとは

DBTとは、Dialectical Behavior Therapyの略であり、日本では弁証法的行動療法と訳されている。認知行動療法にルーツをもち、ボーダーラインの患者の治療に有効であるとされている。「Inter personal effectiveness (対人関係)」「Emotional regulation (感情調整)」「Distress tolerance (苦悩耐性)」「Mindfulness(マインドフルネス)」の4項目のスキル獲得を目指し、それぞれのトレーニングをサイクル的に繰り返し行う。DBTで重要なのは、「変化・適応」に着目しすぎず、「自己受容」も大切にするという点である。適応のために変化する部分と、ありのままの自分として受け入れる部分のバランスが重要であると考えられている。心理士は、この2つのバランスを取りつつ、両方を患者に促す必要がある。

4. 感想

研修ではDBTの理論やスウェーデンの心理士の資格取得の課程について詳しく説明があった。日本ではあまり普及していないDBTだが、変化と自己受容のどちらも大切にするという視点が興味深いと

感じた。説明してくださった臨床心理士の方は、「ボーダーラインの患者は極端（全て変化するか、全てこのままでいる）な結論を出しがちであるが、DBTの治療ではそのバランスを取ることが重要である」とおっしゃっていた。また、このバランスをとるために、心理士が変化や受容を促すことが大切であるとのことだった。この場合、心理士が患者の容態や考え方の癖を理解する必要があるため、専門的なスキルが求められると考えた。治療方針に悩んだ場合は、スーパービジョンを利用したり、先行研究を参考にするとのことだったため、日本の心理士に通じる部分も多くあるのだと感じた。

サステナブルな街 ハンマルビー・ショースタッド

(Hammarby sjöstad)

小泓 詩織

1. 概要

ハンマルビー・ショースタッドは、ストックホルム市に位置する住宅街である。1990年代には工業地帯であったが、2004年にストックホルムがオリンピックの開催地に立候補したことをきっかけに現在の住宅街になった。当時のオリンピックの開催地決定においては、環境への配慮が非常に重要視され、グリーントウンなどの環境プロジェクトが大いに評価されていた。この背景から、環境に優しい街づくりが進められ、選手村としての役割を担うべく整備が進められた。結局オリンピックの開催地には選ばれなかったが、選手村として整備されたこの地域は、住民たちにとっての持続可能な住環境を提供し、地域全体の美しさを高めた。

2. 環境にやさしい循環システム「ハンマルビーモデル」

ハンマルビーモデルは、環境に優しい循環システムとして、ゴミを資源に変えるという画期的な取り組みを展開している。このモデルでは、現在ゴミの80%をリサイクルし、ゴミやお湯などを有効に再利用することが出来ている。



まず、トイレの下水を例にとると、下水処理場で水を浄化し、残った排泄物をバイオガスに変えている。また、お湯からもエネルギーを取り出し、そのエネルギーを住宅に利用している。日本では捨てる人も多いと思われるが、ハンマルビーでは、お湯を捨てることはエネルギーの無駄使いとなる。このようなアプローチは、ゴミを使って資源を生み出す循環の一環として機能している。エネルギーの再利用は、環境への負荷を軽減するだけでなく、持続可能なエネルギー供給の一環として大きな意義を持っている。

ゴミの収集と分別においても、ハンマルビーモデルは革新的な方法を採用している。吸引収集システムを導入し、パイプが住宅地を繋ぎ、ゴミを吸い込むように収集する。この仕組みにより、トラックが住宅地に進入することなく、ゴミが中央集積所に効率的に集まるという。そして、プラスチックなどは店で回収され、専門のゴミ会社がリサイクルを担当しているそうだ。

このように、ハンマルビーモデルは、環境への負荷を最小限に抑えつつ、資源の有効活用を実現している優れたシステムであり、これらの取り組みが持続可能な未来への道を示しているといえる。

3. 人と人を繋ぐ教会

ハンマルビー・ショースタッドには、現代的な教会が存在し、その役割は単なる宗教的な場所に留まらず、地域社会における重要なミーティングポイントとなっている。特に、小さな赤ちゃんを抱える親たちの間で、この教会はコミュニティの中心となっているようだ。ここで形成される親同士のコミュニティは自発的なものであり、日常生活でお互い助け合い、情報を共有する場として機能している。このようなアクティブで温かいコミュニティは、新たな親たちにとっては特に心強い存在となっているであろうと感じる。さらに、この教会は福祉分野にも積極的に関与しているようだ。

ハンマルビー・ショースタッドの教会が育む親同士のコミュニティと福祉活動は、現代社会において地域社会の結束を深め、共感とサポートの文化を築いているのだろう。

4. 感想

ハンマルビー・ショースタッドを視察し感じたことは、住人にとって非常に住みやすい街になっているということだ。ここでは特に市の都市計画が積極的に住環境の向上を図っているようで、その成果が所々に見受けられた。

例えば、地域を形成する際には芸術作品の導入が必須であり、その制作には芸術家が関与している。これは特に子どもたちの遊び場として機能し、地域住人が楽しむことができる場所となっているようだ。私が見た芸術作品は噴水だ。これは、近くに水道関連のオフィスがあるため、噴水が設置されているようだ。このように設置される芸術作品は、その地域にあるものと関連しているという。一定の時間を空けて、水が出たり、止まったりしており、このような噴水は子どもたちにとっては非常に楽しく遊べる遊具になると思った。

ハンマルビーはバルト海に繋がる川に面しており、住民は趣味でボートを借りて楽しむことができる。ボートに乗ることが人気で、水辺でのリラックスした時間が地域の魅力の一つとなっているようだ。実際に街を歩くと、ハンマルビーは緑豊かで、車などの騒音がなかったため、流れる時間がゆったりとしているように感じ、自分もこのような街に住んでみたいと感じた。ハンマルビーは既に住みやすい街であるが、まだ全部は完成していないようだ。これから市民の意見を取り入れて、より良い街へと変わっていくという。



移民の多い地域のフッスビーゴージュスコーラン小中学校視察

(Husbygårdsskolan)

飯室 遥香 瀧澤 優奈

1. 施設概要

0～9年生までの学校であり、日本でいう小中学校にあたる。全校生徒は約500名で、各学年でクラスは2つあり、中学1年生からクラスは3つになる。中学からクラスが増えるのは、入学したい生徒が増えているからだ。1クラスの生徒数は20～25名程度で、各クラスに担当の先生が2人いる。学校全体の成績も上がっており、この学校で学びたい生徒が増えている。また、発達障害の生徒のためのクラスもあり、特別支援教育の先生が5名いる。学校として、家族や地域の人、また多職種との連携が大切であり、必要であると考えている。

医療サポート、心理的なサポート、社会福祉的なサポート、特別支援が必要な生徒たちに対するサポートといったように主に4つのサポート体制に分かれている。例えば、医療サポートであれば年に2回の健康診断と、一定の年齢になった時にはワクチン接種が行われている。

2. 言語学習について

親が外国出身のスウェーデンで生まれた生徒や、難民に認定された生徒も学校に通っている。母国語ができないとスウェーデン語の習得も難しいため、基本的には母国語もスウェーデン語も両方勉強する。母国語を勉強するかしないかは、親の判断によって決められる。全校生徒約500名のうち、約300名が週1時間母国語の勉強をしており、ここにもインクルーシブ教育を大切にしていることが見られる。ソマリア語やアラビア語など25か国語、それぞれの言語に対応した職員たちがいる。それぞれの職員は、ストックホルム市が雇い、色々な学校を回っている。この学校では、言語教育を大切にしているため、一般の学校よりも教師の数が多という特徴がある。

3. 社会教師について

お話して下さった先生は、フランス語の先生と社会教師を掛け持ちしている。社会教師というのは、スウェーデンでは10年ほど前から始まった取り組みで、コミュニケーションや人間関係を教える教師のことである。社会教師は、休み時間に校庭などで一緒に遊ぶなど、日頃から生徒の身近にいて生徒との良好な関係ができています。そのため、通常の授業をしやすという利点がある。

4. 警察について

警察が学校と連携協力しており、2015年からより協力体制が強化されている。不登校の生徒の様子を見たり、ギャンブルや家庭内の事情に対応したりしている。またギャングに入ろうとしている生徒がいた場合、警察が実際に介入することもある。週1や月1で学校に訪問し、生徒と親の関係の様子を見ていることもある。半年に3回、警察や学校、ソーシャルワーカーや市町村でミーティングを行い、どのような家庭問題があるのかミーティングを行っている。

5. ソーシャルワーカーについて

学校にいるソーシャルワーカーは市の職員であり、不登校の生徒に対応するプロジェクトとして2013年から試験的に運用が始まった。2017年にソーシャルワーカーの効果が確認できたので、2018年から学校に市のソーシャルワーカーが配置されるようになった。訪問した学校は、市からの予算が高いため常勤のソーシャルワーカーが1名いるが、学校を掛け持ちせずに常勤という勤務体制は珍しい。ソーシャルワーカーの業務内容は多岐に及ぶ。先生や生徒、生徒自身の保護者との4者面談、臨床心理士やスクールナースを生徒に紹介する、保護者への連絡や状況の聞き出し、市町村へ連絡して支援に結び付ける、先生と生徒の間に入って問題を解決する、生徒に朝電話をして今日は学校だよと起こす、生徒を家から学校まで連れて行きその過程で友達と話す練習相手になる、教室の隅でしか勉強ができない生徒の隣に座るなどの業務がある。ソーシャルワーカーによるサポートを生徒の親に「必要ない」と言われたことは一度もない。

6. スクールカウンセラーについて

スクールカウンセラーは、生徒同士でいじめがあるか、人種差別的な行為が行われているのか、発表する義務があり、公表された情報については、教育委員会へ報告される。生徒たちの心理的な問題として、SNSで他人と自分を比較したり、学校の成績が周囲と比べて悪かったりといったことから自尊心が低いことがある。他にも、親から虐待を受けている場合や、親が何かしらの依存症を患っていることから、心理的な悪影響を受けている生徒もいるという。ギャングに入ろうとする生徒や、自殺のリスクが高い生徒については、義務として市町村に情報を提供する必要がある。

7. 考察と感想

スウェーデンでも、学校現場でいかに多職種連携が重要なのか実感した。視察した学校では、それぞれの専門職が各々の視点から生徒に対してどのように対応しているのか具体的に話を聞くことが出来、大変勉強になった。日本でも警察が学校に来ていじめの悲惨さや薬物乱用の恐ろしさといったことを生徒たちに話すことがあるが、スウェーデンのように実際に生徒や生徒の家庭に介入したり、生徒がギャングに入った場合対応したりするという点が、日本とスウェーデンの文化差を感じ興味深かった。日本ではいじめそのものを無くそうとし

ているイメージがあるが、スウェーデンではいじめが起きることは当たり前のものとして、いじめが起きた場合、どのように対応していくのかそれぞれの学校でマニュアルを作るのは、日本でも有用出来るのではないかと考えた。また言語学習については、日本でも外国籍の親を持つ生徒も少なくないので、親の母国語を学習する機会を増やすことが出来ればと考えた。(飯室)

私はスウェーデンの 学校教育において、特に「予防」と「情報開示」に力を入れていると感じた。例えば、健康チームは生徒を予防的にサポートしているし、いじめ等が起こるまで待たずに予防的に対応している。ソーシャルワーカーは「早い段階でサポートすれば不登校は防げる」と述べていた。また、どの学校でも起こりうるいじめだからこそ、保護者に対してその予防策を説明することが大切であることや、リスクがある生徒は市町村への報告義務があることを学んだ。日本では、いじめなどの問題を隠そうとする体質が見られると感じる。しかし、スウェーデンでは問題が起こる前から多職種と連携することで予防をし、その上で情報開示も行っている。これらの取り組みにより、教師が1人で問題を抱えることなく、情報を共有し、生徒一人ひとりに合った柔軟な支援ができると考えた。また、スウェーデンのスクールソーシャルワーカーは、日本のそれよりも必要性や重要性が広く認識されていると感じた。日本もスウェーデンのように、学校における専門職が果たす役割や専門職の整備の必要性、そして地位向上への理解が広まってほしい。(瀧澤)



↑ 小学校で頂いた給食(ビュッフェスタイルだった)



↑ 給食を頂いた食堂

オンライン心理カウンセリングサービス (Din psykolog)

野中 愛美 近藤 映月

1. 概要

数年前に感染症がまん延してから、初期医療センターでのほとんどのカウンセリングはオンラインで行われている。誰でも受けることができ、主に18歳から40歳の来談者が多く8割は女性である。対面でのカウンセリングより行えることが少ないので、事前にオンラインでできることの限界を伝えてから始める。

カウンセリングは zoom のようなビデオで行う。スウェーデンでは認知行動療法が主流であり、オンラインでも同様である。しかし、来談者の状態に合わせて力動的心理療法なども行い、調節している。状態が軽い方も重い方もいて、ストレスによる不眠やうつ傾向の症状に関する相談が多い。また、筋疾患の痛みに伴う心理的問題を抱えているような、身体疾患を持つ方には、定期的にそちらの疾患の治療を受け持つ先生とも連携することもある。

2. 利点と欠点

利点として、オンラインでの実施になってから、来談者数が増えたという。その背景として、1つ目に来談しやすくなったことだ。病院の心療内科に行くより、オンラインの方がはるかに利用手続きも来談も簡単で、カウンセリングが身近になった。2つ目に、病院に行くことが怖くて行けなかった方々が来談できるようになったことである。自宅などでも相談できるので、手軽になった。また、オンラインカウンセリングを始める前は、オンラインでは十分なカウンセリングの効果が見られないのではないかという懸念が心理職の関係者間で挙げられていたが、実際に行ってみると予想以上に効果があったと伺った。欠点として、対面でのカウンセリングよりも、来談者間に平等な効果が見られないと伺った。まず、来談者を外部機関に繋ぎづらいことが挙げられた。必要性を感じたら、外部機関を勧めるが、やはりオンライン上で伝えるより対面のほうが繋ぎやすいとおっしゃっていた。また、オンラインでは画面に映っている部分しか見られないため、自傷行為などの身体の異変の発見や、行動の観察が難しいことも挙げられていた。

3. その他

お話を伺った臨床心理士の方は現在のオンラインでのカウンセリング以前に、保険会社を経由した経営者などを専門に対象としたカウンセリング、初期医療センターにおける給料をもらいながらの1年間の実習、大学時代に精神科病棟でのアルバイトの経験があった。そのような多様な経験を積んでいて、正規雇用として雇われる資格をお持ちの方という事もあり、お話を伺った会社のオンラインカウンセリングの質が高く保たれ利用されているのではないだろうか。

スウェーデンの心理の資格は2種類あり、そのうちより高度で臨床心理士と訳している国家資格がある。臨床心理士の資格を取得するためには、複数回の実習が含まれる5年間の大学でのプログラムの学修が必要である。スウェーデンは日本と学校の制度が違い、大学で希望の学部に入るには高校での成績が必要である。そして臨床心理士のプログラムを受けるには、かなり優秀な成績を高校で修めなければいけないため、心理を扱う者の専門性が必要なのがスウェーデンでは広く認められていると考えることができる。

4. 考察

日本の心理職の現場を理解しているわけではないため間違っているかもしれないが、スウェーデンでは日本よりも心理職の立場が強く、カウンセリングなどのハードルは低く一般に普及しているように感じた。心理士の資格を取ることの難しさはあるが、それだけ資格を取ったあとの需要も多いように思えた。

また、伺った会社は正規雇用の形が可能で、オフィスはあるが出社の必要はないオンラインの勤務であり、スウェーデン国外在住で働いている人もいるというところは、働く側としても来談者側としても、とても魅力的に考えられる。

オンラインでのカウンセリングは利点ばかりでなく欠点もあると学んだ。しかし、オンラインで行うようになってから来談者が増え、尚且つ効果があるとわかったということは、オンラインカウンセリングが今後ますます普及するのではないかと考えた。欠点をどうやって補うかを試行錯誤しながら、より効果のあるオンラインカウンセリングが実現されることが期待される。そして、オンラインでのカウンセリングをきっかけに対面でのカウンセリングに関心を持つ方も少なくないだろう。

少人数制特別支援学校 イカスス・フリースクール

(Ikasus grunskola och gymnasium)

志牟田 美佳 古山 なつ

1. 概要

訪問した特別支援学校は、民間企業が運営しており、知的障害を持ち、加えて自閉症や発達障害の兆候がある小学生～高校生の生徒23名が在籍している。教員は2名で、特別支援教育に関するライセンスを持っており、ほかにアシスタントが在籍するという体制である。ここで学ぶ生徒のほとんどは、3～6歳程度の知的レベルで、話すことができないという。そのため、この学校では自立を重視しており、意思表示や自己管理、コミュニケーションができるようになり、社会で生活できるようになることを目指したトレーニングを行っている。卒業後は、その生徒に合った障害者向けのアクティビティセンターに通うことが多い。

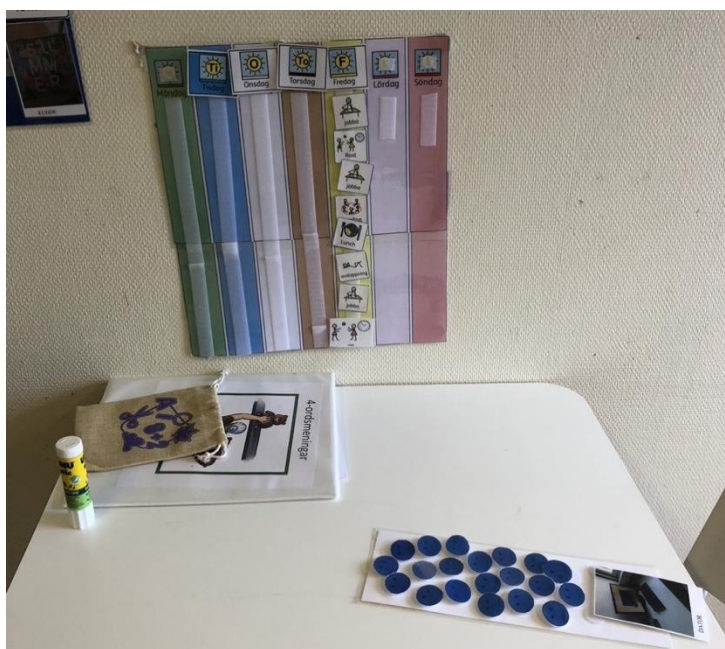
2. 学校内の設備

小学校、中学校、高校で生活エリアを分けており、エリアを分ける扉にはロックをかけている。基本的に授業は小学校、中学校、高校で分けて行っているが、手工芸、音楽、体育の授業は分けずに行っている。生徒ひとりひとりに個室が用意されており、ほとんどの時間はその個室でアシスタントと一緒に過ごしている。授業や遊びに使用できる広い部屋があり、集団授業はそこで行われている。校庭にはさまざまな遊具があり、身体感覚のトレーニングができるようになっている。また、行動障害を持つ生徒が暴れてしまうことがあるため、窓が割れないように衝撃に強い窓にしている。

3. 支援体制

全ての指導は、各生徒の状況に合わせた個別育成計画/学習計画（IUP/ISP）に基づいて行われる。褒め方やリスクなどについても計画があり、毎日記録ファイルも記入しているため、スタッフごとにばらつきなく、全員同じ支援ができるようになっている。このようにすることで、変化が起きたことで生徒が混乱するのを防止している。計画は、教師が作成し、アシスタントが指導をサポートしている。この学校には、特別支援教育のライセンスを持つフルタイムの教師が2人と、パートタイムのアシスタントが多数働いており、手厚い支援が行えるようになっている。生徒は個室で過ごす時間が多く、アシスタントと一緒にさまざまなア

クティビティを約20分ずつ行っている。話すことができない生徒でも、自分の意志表示ができるよう、アクティビティー一覧の絵カードや、ご褒美一覧の絵カードが用意されており、指差しで自分のやりたいアクティビティや欲しいご褒美を選んだり、1日の予定を組んだりすることができるようになっている。個室内で過ごす時間が多いものの、集団授業も行われており、その場合は、生徒が最高6人に対して、教師が1人とアシスタントが1～2人で行われている。



生徒の個室内にある絵カード

4. スタッフに対する配慮

この学校では、生徒に対する配慮だけでなく、スタッフの負担を減らすための配慮もなされている。個室内で生徒と過ごす時間が長いアシスタントは、重度の障害を持つ生徒を長時間1人で担当していると、大きな負担を感じてしまう。それを防ぐために、重度の障害を持つ生徒と軽度の障害を持つ生徒を交代で担当するようにしているという。こうすることで、スタッフの中の誰かに負担が偏ることなく、支援を行うことができる。このような配慮がされていることもあり、仕事にやりがいを感じて何年もスタッフを続けている人が多いという。

5. 登下校・外出時の支援 学童

この学校に通う生徒の中には、行動障害のある生徒も多いため、登下校や外出の際には、特に注意が必要だ。登下校時は、送迎バスを利用する生徒と、親が送迎をする生徒がいる。送迎バスには、特別なシートベルトがあり、必要な場合にはそれを使って安全に登下校ができるようにしているという。拘束はかわいそうだと思うかもしれないが、安全のためには必要なことなのだと校長先生が説明をしてくださった。生徒たちの心の傷にならないように、「安全のため」ということを伝えるようにしているそうだ。また、散歩などの外出時には、1人の生徒に対して2人のアシスタントがつく。生徒が急に走り出したり、危険なことをしたりする可能性があるため、安全のために2人のアシスタントが必要なのだという。

6. 考察

この学校を訪問し、ひとりひとりに個室があることと、多数のスタッフによる手厚い支援に驚いた。重度の障害を持っていて、入学したばかりのころは暴れてしまうことが多かった生徒が、個室という安心できる場所とスタッフによる手厚い支援により、落ち着いて生活できるようになったというお話を聞き、個室の重要性とスタッフの方々の熱意を強く感じた。また、そのような熱意のあるスタッフの方々のやりがいに任せているのではなく、スタッフの方々の負担を軽減させる取り組みをしっかりと行っていることも、非常に重要なことだと感じた。スタッフの負担軽減は、スタッフと生徒のお互いのために必要なことであるため、日本でももっと重視されるべきだと考えた。

加えて、障害を持っていても、自分の気持ちを伝えたり、コミュニケーションを取ったりすることができるようにトレーニングをしているのが印象的だった。実際に個室で絵カードを見せてもらい、話すことができなくても、絵カードを用いて視覚化することで、やりたいことや欲しいものを伝えることができるようになるのだということがよく理解できた。自分のことは自分で決めるという訓練を積むことが、障害者の自立につながるのだと強く感じた。

事前学習1班

スウェーデンの福祉行政と障害者雇用

大沢 彩夏 大橋 真奈 野中 愛実

金崎 壮太 瀧澤 優奈

1. スtockホルム市の福祉行政について

私たち1班はストックホルムの福祉行政とスウェーデンの障害者雇用についての事前学習を行った。

北欧に位置するスウェーデンの行政は21 の「ランスティング」または「レギオン」と呼ばれる日本における「県」のようなものと290 の「コミューン」と呼ばれる日本における市区町村のようなものによって担われている。コミューンは基礎的自治体であり、その所管する事務の範囲は介護・福祉など多岐にわたる。ランスティングは地域的に複数のコミューンを含むより広域的な自治体であり、所管する事務は保健医療とコミューンに比べて種類が少ない。

私たちはその中でもスウェーデンで最大のコミューンでありスウェーデンの首都であるストックホルム県の中のストックホルム市の地方自治に焦点を当てた。特にその中でも教育と地区開発を取り上げたい。

ストックホルム市では21万3000人の外国にルーツがある人がおり、住民の約23.4%にあたる。スウェーデンは公用語がスウェーデン語であり、外国にルーツを持っている移民者がみんな話せるわけではない。そのためストックホルム市では移民者へのスウェーデン語教育を重視し、スウェーデン語の基礎知識とスウェーデン社会について学ぶ機会を無償で提供している。

また、地区開発の分野ではスルッセン地区の事例が挙げられる。スルッセン地区はメーラン湖の出口にあり、バルト海への入り口に位置するストックホルム市の中心の一部の島と旧市街をつなぐ水と人の結末点と呼ばれている。しかし、水と人の結末点であるスルッセン地区において降水量の増加や河川や湖、海の水面上昇が起き、首都圏の住宅や産業、公共交通などきわめて広範な領域に及ぼす洪水の可能性が出てきた。この問題に対してストックホルム市が行ったのは地下鉄を湖の橋の上を通るルートからトンネルを掘って水面下を通るルートにすることだった。そうすることで水面上昇を防ぐことはできたが一方で地域的なリスクだけでなく首都機能へ直結する問題の対処は「自治体の能力や領域を超えているのではないか？」という問題点も見つかった。

2. スウェーデンの障害者雇用について

スウェーデンにおける障害者雇用制度の歴史は1950年代から始まっている。1950年代には賃金水準格差の縮小、失業者の発生と吸収を狙いとした「レーン・メイドナーモデル」が提唱されたことにより、1960年代には障害者も非障害者と同様に職業訓練と労働移動などに重点を置いた雇用政策である「積極的労働市場政策」へとつながった。1974年には高齢者・障害者に対する雇用の確保と職業の安定のための「雇用促進法」、すべての労働者の雇用の確保と障害者に対しての特別の保護資格を定めた「雇用安定法」が施行された。

1980年代には「賃金補助金政策」がとられ障害者を雇用する企業が障害者に払う賃金の一部を政府が負担する代わりに事業主に障害者の労働能力を上昇させるための実施計画を策定することを義務とした。また、「雇用保護法」を施行し解雇に対しての制約をかけ雇用の保護も行った。1990年代には実態調査もとに「雇用差別禁止法」が制定されたことによって障害の有無を理由とする雇用の差別を禁止とした。2000年代には労働市場以外でも障害者の差別を禁止とする「差別禁止法」が施行されるとともに7つの差別に関する法律を統合した「反差別法」が施行されている。このような差別禁止に対する姿勢からインクルージョンの浸透、障害者の労働参加へとつながっていったと考えられる。障害者の労働・社会参加が促進されることは日本と同様に少子化と高齢化が進展し、労働力の減少・非労働力人口が増加しているスウェーデンにおいて障害者への雇用機会の提供、経済活動の維持・拡大につながる。

また、スウェーデン社会では障害者雇用制度とともに1980年代からノーマライゼーションも根付き始めた。1980年には「社会サービス法」が制定されるだけでなく82年には「健康医療サービス法」が制定され、障害者向けの行動計画が始まり、「医学モデル」から「社会モデル」へと移り変わっていった。

スウェーデン国内での障害者雇用とノーマライゼーションの公的な実践例として「サムハル」が挙げられる。「サムハル」とはスウェーデン国内の障害者雇用をあっせんする国営企業であり、障害者のスキルアップを図り、障害者が共住する地域で最も適した職種・業種の仕事へ就職を手助けすることを最終目標として掲げている施設である。「サムハル」は公的機関や一般企業との連携も行っており、「公共職業安定所」は「サムハル」で就業するための条件を満たしている労働者（候補者）を障害の程度が重い方々を優先として選定しており、一般企業は「サムハル」でトレーニングを受けた方を採用するなど環境を整え、障害特性を理解したうえで秀でて得意な力を活かせる職業を提供している。

一般企業の取り組みの例として2つ挙げると、1つ目は「G社（スーパーマーケット）」がある。G社は「サムハル」で訓練を受けた、知的障害がある、記憶力に長けた人を品物管理のマ

ネージャーに採用することで商品に関するあらゆることを把握し、部下への指示・問い合わせの対応をこなしてもらっている。2つ目は「グラサード・ゴンゲン（レストラン）」がある。ここでは調理、食器洗い、レジすべての役割を障害のある方が担当し、指導員がマネジメントをすることで利益の出る他店と競える飲食店となっている。このように国は障害者の障害の程度を査定し、就業のための最適なあるいは最善なプログラムは何かという視点で、「サムハル」を使い、それ以外の補助金雇用や教育・訓練プログラムへと振り分けることで一人一人が得意なことを活かせる就業を目指していたことがわかる。

参考文献

- ・朝日雅也 「スウェーデンにおける障害者雇用施策」 DINF傷害保険福祉研究システム
- ・足立興治・水之浦啓介・名武和代・新治義久（2020）,「障がい者の活躍に向けた人材マネジメントの方向性,知的資産創造,野村総合研究所」, 2, pp108－110
- ・介護プラス「スウェーデンに欠かせないコミュニケーション」（閲覧日：2023年7月14日）
<https://www.kaigoplus.com/column/60>
- ・株式会社 かもめ、「ストックホルムの知的障害者就労レストラン『グラサード・ゴンゲン』」 KAMOME TOUR（2019年）（閲覧日：2023年7月14日） <https://www.kamometour.co.jp/wp/2018/04/02/post-789/>
- ・福島淑彦 「サムハル(Samhall)-スウェーデンにおける保護雇用の取り組み」、独立行政法人労働政策研究・研修機構（2011年）（閲覧日：2023年7月14日） https://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2011_4/sweden_01.html
- ・福島淑彦 「スウェーデンの障害者労働市場」、北ヨーロッパ研究、15巻 p 25-34 （2019年）
- ・藤岡純一著 「スウェーデンにおける社会穂的包摂の福祉・財政」 中央法規 （2016年）

事前学習 2 班

スウェーデンの障害者教育と都市開発

鷲谷 あかり 飯室 遥香

柴田 佳 助川 彩穂 渡辺 瑠夏

1. スウェーデンの障害者教育について

事前学習でスウェーデンの教育について調べたことは、日本と比べて発展したインクルーシブ教育についてと、知的障害学校についてである。まず私たちは事前学習で、スウェーデンは日本と比べインクルーシブ教育の導入が進展しているということを学んだ。1980年以降に学級編成枠が撤廃され、活動に応じて集団を編成するため、特別学級が設置されておらず、基礎学校で柔軟な学習集団を編成することが可能となっているのである。一方でスウェーデンの知的障害学校では、感覚過敏等で学習に集中ができない生徒のためのパーテーションで区切られた学習空間が用意されていたり、自閉症等を有する生徒のための視覚優位なスケジュール表が用意されていたりするということを学んだ。これらのことから、インクルーシブ教育の理念のもとに障害がある子供が基礎学校に入ることも、知的障害学校に行くこともあるということを知り、さらにそのどちらにも障害児が過ごしやすくなる工夫がなされていることを知ったのである。

実際に訪問したストックホルム市内の重度障害者高等学校では、自閉症や発達障害の生徒たちが在籍していて、知的障害が無ければこの学校には入学できない。生徒のほとんどは喋ることができないが、先生はサインや写真を使ってコミュニケーションをとっている。授業は、生徒一人につきアシスタントが2、3人付き、アシスタントの先生方を指導する特別支援級のライセンスを持っている熟練の先生も在籍している。事前学習で知的障害学校には視覚に特化したスケジュール表が用意されているところがあると学んだが、この学校でも目にする事ができた。（図1）この学校も、生徒の学習のための様々な工夫がなされていると実感した。今回学校を訪問して、事前に調べて学んだ取り組みを、実際に自分の目で確認できたことに深く感動し、同時に多くの工夫を学ぶことができた。



図1 スケジュール表

2. ストックホルム市における都市開発

事前学習では、自分達の滞在先であるストックホルムの都市計画についてと、訪問先であるハンマルビー・ショースタッドという地区について、調べ学習を行った。まずは、ストックホルムの都市計画についてである。ストックホルムはヨーロッパで急速に成長している都市の一つであり、2010年には地球温暖化対策に優れた都市を選ぶEUの「緑の首都」に選出された。環境や住民の生活に配慮した持続可能なビジョンを掲げており、このビジョンをもとに新しい都市開発プロジェクトが計画、実施されている。次に、ストックホルムの居住地区であるハンマルビー・ショースタッドについてである。ここでは1990年代初頭から環境に配慮した大規模な都市開発プロジェクトが進められており、環境負荷を半減する先進的環境都市を目指している。ここは人口増加をきっかけとして、環境面も重視した「持続可能なまち」に作り変えられることとなった。「持続可能なまち」を実現する為の具体的な取り組みとして、交通面ではトラムと呼ばれる路面電車やフェリーの運航、自転車や電気自動車の利用促進、エネルギー面ではゴミの分別や再利用、水の面では節水家電の普及、家庭排水と工業排水の完全分離などがある。

これらのことを調べた上で実際にストックホルムを訪れてみると、数々の取り組みを実際に見ることが出来た。路面電車のトラムは研修の日も自由行動の日も利用し、(図2)移動時にはフェリーも利用した。道には自転車専用の道路があり、(図3)事前学習では触れていなかったが、有料で誰でも利用できるスクーターの貸し出しが至る所で行われていた。(図4)集合住宅の庭には、エネルギー面の取り組みで調べていた、地下でゴミの分別を行い、エネルギーの再利用に繋がるゴミ箱が設置されていた。(図5)

ハンマルビー・ショースタッドを訪問した際には、より具体的な都市計画のお話を聞くことが出来た。お話を聞いていた場所にはとても綺麗な噴水があったのだが、すぐ隣は水道会社であり、ここには芸術を知らないといけないという決まりがあると担当の方が話されていた。その地区の都市計画を決める権利は市が持っており、集合住宅の建設、居住人数、建築デザイン、プレスクールをどの程度作るかなどは市が決めているそうだ。しかし市民が計画に対して意見を言うことは出来るという。市民と一緒に決めていく為、時間がかかるそうだが、その分、環境面でも芸術面でも、より良い市を作る事が出来ると考えられるだろう。

ハンマルビー・ショースタッドのこの取り組みは極めて優秀で、世界的にも有名であり、大きな地区などではなかなか真似できることではないと感じる。しかし行政の決断に合法で意見を言えるような仕組みは、日本の取り組みにも取り入れられるのではないかと考えられる。ストックホルムでの交通面の工夫に関しては、本当に環境面に配慮されておりとても理想的だと感じた。すぐに真似することは出来ずとも、ストックホルムの取り組みを心に留めておけば、日本でも、いつか環境を配慮できる取り組みに生きるかもしれない。住んでいる国は違くとも、同じ地球であるのだから、今回の経験を忘れず環境のことを思う気持ちを常に持ち続けていたいものである。



図2 トラム



図3 自転車専用道路



図4 スクーター



図5 ゴミ箱

事前学習 3 班

スウェーデンの子育て制度と心理職及び医療制度

志牟田 美佳 古山 なつ 近藤 映月
有賀 翼 筒井 くるみ

1. スウェーデンの子育て制度

スウェーデンは高福祉国家として名高く、福祉の根幹を担う「子育て支援」において、内閣府の「少子化社会に関する国際意識調査報告書」によると、「子どもを産み育てやすい国」であると回答した国民の割合は97%にも及ぶ。この高い数値には充実した子育て制度が背景としてある。まず、妊娠・出産に関する費用が基本的に無料であり、出産時には父親も10日間の休暇を取ることができる。また、育児期には両親それぞれ90日間の休暇、それに加え90日間の休暇を父親か母親のどちらかが利用することができる。その間、390日分の給料の8割が支払われる。子どもが病気になった際などは、年間60日間の休暇を両親が取ることにもできる。さらに18歳未満の子どもの医療が無料であったり、大学までの学費がかからなかったりと、子育てに関する仕組みが整っている。

また男性の家事への意識にも差がある。男女の家事の参加率を示す、有償労働時間と無償労働時間の男女比を見ると、日本では男女に大きな差がある。一方でスウェーデンでは、その差が小さい。これらから、子育てや家事に関する制度と意識の2点において、スウェーデンは非常に高い水準にあると言えるだろう。

2. スウェーデンの心理職と精神科医療

スウェーデンでは、心理の国家資格を取得するためには、大学で心理学についての教育を5年間受けた後、1年間の実習が必要とされる。この要件を満たす大学は国内に11か所である。心理の専門職が活躍するBUPは中度・重度のメンタルヘルスの問題を抱えている18歳までの子どもや若者に専門的なケアを提供する施設であり、重度のうつ病や深刻な摂食障害、精神疾患などが、その対象である。精神科医療の歴史を辿ると、近代以降1960年代までは大規模施設に患者を収容し、手厚く医療福祉を介入させるスタイルだったが、ノーマライゼーションの考え方が普及すると精神科医療の大規模な改革が行われた。その結果、精神科病床が大幅に減少することになった。病床の減少により地域の社会資源が不足したため、基礎自治体での連携がより求められるようになった。基礎自治体の行う支援として、ホームヘルプなどの日中のサービスや一時預かり事業のレスパイトサービスなどが挙げられる。対象者は18歳以上の精神障害者で長期にわたる相当程度の社会的機能障害があり、その結果日常生活に大きな支障をきたす障害を持っている者に対するパーソナルオンブズマン制度は、診断や治療に拘るのではなく、要支援者のニーズや要望に焦点を当て、段階的に支援を進める支援法である。一人ひとりに向き合うといった考え方が普及し、この方法は多くの基礎自治体で取り入れられている。

参考文献

- ・石田晋司 (2013) 「スウェーデンにおける精神障害者支援から考える日本の精神障害者地域生活支援の在り方」, 『海外社会保障研究』 No. 182, p. 30-40
- ・海外の精神科病床削減の歴史と現在・日本への応用 (閲覧日: 2023年7月17 日)
https://psychident.com/psychiatric-beds_abroad/
- ・スウェーデン観光・移住に関するじょうほう発信ブログ (2020)
「スウェーデンの育児休暇制度～子育てしやすい国ランキング 1 位の理由～」 (閲覧日: 2023年7月17 日) <https://swetabi.com/raise-child>
- ・Child and Adolescent Psychiatry (閲覧日: 2023年7月17 日)
<https://www.slso.regionstockholm.se/en/our-healthcare-services/bup/>
- ・独立行政法人 労働政策研究・研修機構 (2018)
「スウェーデンにおける仕事と育児の両立支援施策の現状 一整備された労働環境と育児休業制度」 (閲覧日: 2023年7月17 日)
https://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2018/12/sweden.html
- ・内閣府 (平成 17 年・平成19年) 「少子化対策白書」 (閲覧日: 2023年7月17 日)
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/index.html>
- ・内閣府 (令和2年) 「少子化社会に関する国際意識調査報告書」 (閲覧日: 2023年7月17 日) http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/r02/kokusai/pdf/zentai/s5_4.pdf
- ・内閣府 (令和3年) 「家事に関する配偶者との役割分担の希望 生活時間の国際比較 (男女別)」 (閲覧日: 2023年7月17 日)
https://www.gender.go.jp/research/weekly_data/08.html
- ・内閣府 (令和3年) 「末子が就学前の夫婦の仕事時間、家事・育児関連時間 (5年ごとの推移)」 (閲覧日: 2023年7月17 日)
https://www.gender.go.jp/research/weekly_data/09.html
- ・NATIONAL REQUIREMENTS SWEDEN (閲覧日: 2023年7月17 日)
<https://www.europsy.eu/national-requirements-sweden>

事前学習 4 班

スウェーデンの小学校と病児教育

土肥 ほの花 平野 暖佳

小泓 詩織 高橋 和愛

1. 小学校

私たち4班は、スウェーデンの小学校と病児教育についての事前学習を行った。主にその概要と日本との違いを調べ、発表した。

スウェーデンの教育制度は基礎学校9年・高校3年・大学3年の教育課程で、そのうち義務教育は、7～16歳の9年間である。この9年間はグルンドスコーランと呼ばれる小中一貫校に通う。スウェーデンの学校では、基礎学校・高校・大学の授業料が無償で提供される。スウェーデンでは、幼稚園への入園は義務ではないが、1歳から5歳までの対象年齢の子どもたちが利用することができる。また、6歳の子どもたちは就学前準備教育を受ける権利がある。特徴的なのは、6歳からでも小学校に入学することが可能であり、両親の希望と子どもが就学できる条件を満たせば、入学することができる点である。

また、基礎学校では一般的に教科書や文房具も学校から支給され、学校給食も無料で提供される。小学校の1クラスの平均生徒数は24人で、ほとんどの学校では、1クラスに1人以上の教師が授業を担当し、教師1人当たりの生徒数は平均12.1人である。スウェーデンでは教員採用に当たって、教育学学位の保有とスウェーデン語の語学能力が採用要件となっている。スウェーデン語ができない移民や学習のスピードが遅れる生徒には、クラスの教師以外にもサポートする教師がおり、義務教育では、公的な補習授業が無料で提供される。授業はスウェーデン語で行われ、国語、数学、理科、社会、英語、第2外国語（仏・独・西語は選択）、音楽、家庭科、体育などの科目がある。第二言語はフランス語、ドイツ語、スペイン語から選択できる。学校ごとに独自のカリキュラムが組まれており、国が定める必修科目以外は選択科目である。そのため生徒は自分にあった授業を受けることができる。

生徒同士を平等に扱うプランとして、リーカベハンドリングスというプランの設置が義務付けられている。リーカベハンドリングスとは、いじめだけでなく、性別、年齢、人種、障害、LGBTなどで人を差別しないように、計画的に学んでいくプランだ。スウェーデンの学校教育の目標は、子どもが心身ともバランスよく成長し、民主主義の価値観を理解し、社会で自分の言動に責任を持って生きることができる市民を育てることである。

2. 病児教育

スウェーデンではスウェーデン教育法で、事情により学校に通学ができない場合は病院 あるいは子どもの自宅又はその他の適切な場所で特別指導が提供されなければならないと 規定されており、病院に入院している子どもの教育は居住地の在籍校と病院内学校・病院 内学級が連携しながら保障している。

病児教育の場として院内学級があるが、スウェーデンと日本の院内学級について比較してみると、2点違いがあった。1つは院内学級に通える年齢だ。日本では院内学級に通えるのは義務教育の期間のみなので7歳～15歳までしか通えないが、スウェーデンでは7～15歳までの義務教育の期間に加えて16～18歳までの後期中等教育段階と呼ばれる期間まで院内学級に通うことができる。もう1つは学籍についてで、日本では二重学籍が禁止されているため、院内学級に通うには転籍しなければならない。しかしスウェーデンでは学籍を移動することなく院内学級に通うことができる。

また、スウェーデンでは病院と学校の連携が密に行われている。学習に関しては院内学級の教員が、子どもが在籍する学校の教科書の種類、それぞれの進行度や本人の苦手科目など詳細に情報を得て、入院中の学習計画を作成したり、退院後すぐに復学できない場合には自宅へ教員が訪問し学習する体制を整えたりしている。また病院からスタッフが子どもの在籍校に出向き直接病気の説明を行ったり、病気について書かれた小冊子の配布をしたり、学校の授業に参加できるシステムを整備したりと退院後スムーズに復学が行えるような工夫を行っている。

さらに近年では居住地の在籍校の教師によるオンライン学習や病気の子どもに代わってロボットが「登校」し子どもが遠隔操作しながら学校の学習活動に参加する形態が拡がりつつある。ICT活用によって、より子どもが外界からの孤立を感じにくくなり精神的ストレスの減少が見込めるため、治療にも良い影響をもたらす可能性がある。スウェーデンでは年間300人の子どもが小児がんを発症し、日本と同様子どもの死亡原因の1位を占めている。子どもの入院期間における最大の目標は、病院での生活を、家や学校で過ごす環境に出来る限り近づけることだ。スウェーデンのリンドグレーン小児病院を例に挙げると、病室に外の風景が描かれていたり、ナースステーションは絵本に出てくる可愛らしいお店の外観をしている。

現代社会ではうつ病や発達障害によって学校でトラブルを抱え二次障害となるケース、難民経験によるPTSDなどの精神神経疾患が増加している。このような疾患をもつ子どもたちはBUP、日本語で児童青年精神医学部門と呼ばれるクリニックに入院または通院している。依存症や自傷などの精神疾患をもち日常的に継続的なケアが必要な子どもは、HVBホームに滞在して生活改善を図ることも多い。学校を休んで治療する子どもたちには特別教育が実施されるが、精神疾

患の子どもたちにとっては教育支援も治療やケアの意味をもつ。それは疾患の原因が学校生活にある子どもが多いためである。学校への取り組みに対する姿勢や態度を変えていくことで回復を促している。

参考文献

- ・池田敦子・田部絢子・石井智也・内藤千尋・能田昂・石川衣紀・柴田真緒・高橋智（2022）. スウェーデンにおける病気の子どもの特別教育システムと支援の実際，東海学院大学研究年報，7，79-95.
- ・一般社団法人スウェーデン社会研究所(2021). 【Sweden. se日本語版】スウェーデンの教育(2023年7月20日閲覧) <http://jissnet.com/archives/3928>
- ・Education Career（2022）. スウェーデンの教育の特徴・制度は？日本との違いや”競争原理”が導入された歴史（2023年7月20日閲覧）
<https://education-career.jp/magazine/data-report/2019/sweden-edu/>
- ・小俣智子(2016). 日本の小児がん患者支援への一考察：北欧における福祉・医療・教育体制の概観及び小児がん患者支援の実際，武蔵野大学人間科学研究所年報，5，53-70.
- ・のりそら(2021). 【若者の政治的関心が高い国】スウェーデンの教育【世界の教育】（2023年7月20日閲覧）https://nextageschool.com/sweden/#google_vignette

学生交流会

小泓 詩織 柴田 佳
高橋 和愛 筒井 くるみ

8月29日にスウェーデンのストックホルム大学の学生と交流会を行った。

以下に写真と共に学生交流の様子を紹介する。

1. スtockホルム大学のキャンパスツアー

交流会を行う前、ストックホルム大学のキャンパスツアーを現地の大学生がしてくれた。約30名のストックホルム大学の学生と4班に分かれ、それぞれ日本語と英語を交えながらキャンパスについての説明や雑談を楽しんだ。積極的に話しかけてくれる人が多く最初は緊張していたが、終わるころには打ち解けていた。

敷地内には講義室だけでなく、図書館や体育館といった施設や、コンビニやカフェ、本屋等の店があった。図書館で熱心に勉強をしている学生や、体育館でバトミントンを楽しんでいる学生、カフェの前で仲良く話をしている学生たちをみて、スウェーデンの学生も、私達日本の学生とあまり変わらないキャンパスライフを送っているのではないかと感じた。



キャンパスの風景



駅前に集合！

2. 現地学生との文化交流

キャンパスツアー後は、SQCのオフィスへ移動し、法政大学側からおもてなしをする形で、ストックホルム大学の学生との交流が始まった。交流では、簡単な法政大学の紹介後、アイスブレイクと食事を挟み、日本文化の体験という流れで行われた。

法政大学の紹介では、まず、各キャンパスの特徴・特色を紹介し、次に、現代福祉学部の特徴や理念、今回の研修の目的などについて話した。その後、スウェーデンと比較した日本の人口や面積などの基本情報や文化交流のテーマにちなんだ日本のお祭りの紹介も行った。お祭りの紹介では、実際に開催されている日本のお祭りをいくつか例に挙げ、それぞれの祭りで、ど

のようなことを行うのかを紹介した。そして、日本文化の理解を深めてもらうとともに、文化交流に向けての雰囲気も掴んでもらった。そして、最後に、お互いの親睦を深めるため、アイスブレイクを行った。アイスブレイクでは、二つの本当の内容と一つの嘘の内容の短文を提示し、一つの嘘を当ててもらい、「2 truths and a lie」というゲームを行った。ゲームは、ストックホルム大学の学生と法政大学の学生で小人数のグループに分かれ、お題を出し合ったり、お題の内容について話したりするなど、互いに打ち解け合い、大変な盛り上がりを見せた。

大学の紹介やアイスブレイクの後には、みんなで簡単な食事をとった。その際、メインとなったものは、ザリガニである。スウェーデンでは、夏にザリガニパーティーを行う風習があり、ザリガニの食べ方を教えてもらうなどの体験をさせてもらった。ザリガニは、塩味が強く、エビのような触感で、ほとんど臭みを感じることなく美味しくいただくことができた。その後も、軽食をとりながら、さらに交流を深めた。



食事がある程度済んだ段階で、日本文化紹介へと移り、各ブースで日本文化に関する企画を行った。

1班は日本の夏祭りの定番である射的を担当した。射的のポイントに応じて日本のお菓子を景品として渡した。日本のお菓子をもらえて嬉しそうな人が多く、楽しんでいた。



射的に挑戦してもらう前、割りばしを使った簡易的な鉄砲を自分たちで作ってもらった。



射的の様子

「おっとっと」などの声も日本のお菓子を使用した。

2班では、筆、墨汁、半紙等を持っていき、書道ブースを設置した。書道ブースでは、班員が現地学生たちの名前に漢字を当て、半紙に書いたものをお手本とし、実際に、現地の学生にも自分の名前を書くという形で、書道を体験してもらった。名前に漢字を当てるのが難しい場合は、ニックネームや名前の由来などに漢字を当て、対応した。そして、学生が書いたものは、お土産として、プレゼントした。

ブースには、多くの学生が集まり、順番を待ってもらっている間にも、他の学生が書いているものを褒めていたり、ブースにいる班員たちと話していたりと、ブースは大盛況であった。名前に漢字を当てられた学生たちは、とても喜んでおり、書道体験に関しても、漢字を書くことを難しそうにしながらも楽しんでいる様子が見られ、お互いに楽しい時間を過ごすことができたと思う。また、名前に当てた漢字に関しても、「この漢字にはどのような意味があるの？」など当てられた漢字の意味にも興味を示しており、日本文化にかなりの興味・関心を持っている様子も見られ、とても嬉しく感じた。

学生たちの名前に漢字を当てるといった形式をとったことで、学生たちの名前をより鮮明に覚えることとなり、名前の由来などについても知ることができた。それに加え、会話のきっかけが生まれ、学生たちのより深い理解にも繋がったため、このような形式で、書道ブースの運営をおこなったことは成功であったと言える。反省点としては、書道セットの用意が1セットのみ

となってしまう、書道体験の待ち時間が長くなってしまったため、もう少し書道セットの用意をすべきだったと感じた。しかし、待ち時間のおかげで、学生たちとの会話の機会も増えるなど、臨機応変な対応ができたため、書道ブースは大成功を収めたと思う。



書道ブースの様子



書道体験後の一枚

3班では画用紙を使ってお面の作成をした。アニメキャラやポケモンなど、スウェーデンの学生たちに日本のサブカルチャーが影響を与えていることが知れてとても有意義だった。配布していたお菓子も好評をもらえた。



製作中



良い笑顔！

4班は折り紙のブースを担当した。手裏剣、鶴、紙風船、兜の中から作りたいものを選んでもらい、折ってもらった。中でも一番難易度の高い鶴が人気だった。学生たちは苦戦しながらも最後まで折り上げ、日本の伝統的な文化に触れた。折り方を教える際にコミュニケーションが生まれ、お互いに楽しい時間を過ごすことが出来たと感じる。



集中して折り紙を折る学生達

✿個人報告✿

野中 愛美		42	志牟田 美佳		52
大沢 彩夏		43	古山 なつ		53
大橋 真奈		44	近藤 映月		54
金崎 壮太		45	有賀 翼		55
瀧澤 優奈		46	筒井 くるみ		56
飯室 遥香		47	土肥 ほの花		57
鷺谷 あかり		48	平野 暖佳		58
柴田 佳		49	小泓 詩織		59
助川 彩穂		50	高橋 和愛		60
渡辺 瑠華		51			

充実した海外研修

野中 愛美

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

入学前から海外研修の存在は知っていて、できたら参加したいと思っていたが感染症のため最初は諦めていた。しかし、3年生になって特例で参加できることが決まり、行くことができるからには、多くの発見をしようという気持ちで参加した。海外に行ったことが無く、自分の話す英語が通じるのか、迷子にならないかなど不安な気持ちもあったが、充実した8日間にする事ができた。様々な領域の福祉施設や教育機関、役所などを視察して、どここの施設や機関にも共通して日本よりも柔軟な対応ができているといえるのではないかと考えた。福祉分野では、どの領域でも人の数だけニーズも様々であるので、固定された仕組みの中で支援するには限界があり、十分な支援ができない。しかし、スウェーデンでは様々な立場の人に支援や教育がなるべく平等になるように仕組みや人員が整えられているように見えた。また、利用者や支援対象側がどんな支援や教育を受けられるかを十分な選択肢の中から自分で決定できるともいえる。豊富な選択肢の中から自己決定できることは、支援や教育を受ける側の満足度の向上につながるはずであり、文化的に自己決定に重きをおくスウェーデンならではの感覚を感じた。

2. 特に印象に残っているエピソード

自由視察の日に、スウェーデンの学生とガムラスタンや離島周辺を観光しながら交流したことが印象に残っている。私に1対1で案内してくれた学生の方が歴史に詳しく、案内しながらガムラスタンの街や建物などについて様々なことを教えてくれた。とても詳しくて、知識量に驚いた。話をするうちに、彼は歴史にとっても興味があり、スウェーデンの歴史に関する本だけでなく日本の歴史に関する本も多く読んでいたと言っていた。彼に限らず、スウェーデンの学生の方々は自分の興味のあるものにとっても熱心で、好きなことをとことん突き詰める姿勢が、とても楽しそうに充実しているように見えた。そして、その興味が大学での学びの原動力になっていた。興味のあるものを学びにつなげる姿勢を見習おうと思った。

3. 今後に向けて

現地の人と円滑な英会話ができるように勉強しておけばよかったと反省した。アルバイトの関係で英語の勉強をしているので、英単語や文法には困らなかったのだが、発音がうまくできなかった。お店で注文をするときに、聞き返されることが多かった。おそらく自覚できるくらいに発音が悪かったことが原因だと思われる。それに加えて、声も小さかったと思う。英会話に限らず、相手に聞こえやすい声ではっきり話すことは大切なので、これから様々な場面で気を付けようと思った。

海外研修で学んだこと

大沢 彩夏

1. 海外研修を通しての学び

研修を通して一番心に残っているのは、プレススクールの先生が子どもが困っているときに「私はあなたのことを手伝ってもいい？」と尋ねて了承を得てから子どもの手伝いをするということだ。私自身お節的な性格なこともあるが、誰かが困ってそうだなと思ったときにすぐに手伝おうとしてしまうことが多々ある。しかし、もしかしたらその人は一人で物事を成し遂げたかったかもしれない。誰かのためを思ってした行動が大きなお世話にならないように、コミュニケーションをとることの大切さを学んだ。

2. 印象に残っているエピソード

ストックホルム大学の学生との交流会でザリガニを食べる機会があった。自分で手で剥いて食べるのだが、私は少し手間取っていた。その時に近くに座っていたストックホルム大学の学生が「手伝ってもいい？」と聞いてくれて代わりにザリガニの殻を剥いてくれた。もし私が学生側だったら「貸して」や「剥いてあげるよ」と相手に尋ねるより自分の行動を押し付けていたかもしれない。相手の気持ちを尊重し、了承を得てから行動に移すというマナーがスウェーデン社会にはあることを知った。

この学びを受け、その後の縁日企画では学生が困っていそうだったら必ず「手伝ってもいい？」と聞いてから手伝うように気をつけた。そこから会話が続くケースも多くありコミュニケーションがたくさん取れて意思疎通が以前よりもできたように感じた。

3. 今後に向けて

ストックホルム大学の学生と会話していた時に、日本の英語教育は座学ばかりで全然実践的ではないと言われた。私自身も読んだり書いたりすることができる英文でも実際に会話として話すとなると途端に難しくなることを今回の海外研修で実感した。学生の中には英語を話すことはできるが、自分から話しかけたり会話を続けることが苦手な人もいた。グローバル化が進んでいく中での英語力の大切さを実感したため、これからの生活でより実践的な英語を学んでいきたいと感じた。また、今回の研修では心理、福祉、地域づくりなど様々なことを学んだがその中でも自分はコミュニケーションの大切さを身をもって学んだ。今後色々な人と接する中でその学びを活かしていきたい。

人とのつながり

大橋 真奈

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

今回、数年ぶりの海外研修とのことで、先輩からの体験談を直接聞く機会がなかったため、参加に関しては不安も多くあった。しかし、事務課の方々や京王観光の職員の方、引率の先生方の手厚いサポートや準備によって、安心して海外研修に望むことができた。研修先では実際にその職に従事している方に話を聞くことができたため、具体的な取り組みだけでなく、それに伴う困難や利点を個人の視点から聞くことができ、とても勉強になった。

2. 特に印象に残っているエピソード

研修先の方はもちろん、町の人々や店員さんがとても親切だったことが特に印象に残っている。スーパーまでの道がわからず、歩いていた人に尋ねると、「道はこちらだけど、そのスーパーは高いから、あちらにあるスーパーの方がいいよ」と教えてくれた。また、スーパーでも売場がわからず、店員や利用客に尋ねると、地図を教えてくれた。その地図を読めずに困っていると、わざわざ売場まで着いてきてくれた。海外は日本に比べてホスピタリティに欠ける、治安が悪いといった印象を持っていたが、一切そんなことはなかった。ガイドブックやネット上の情報で知った気にならず、実際に体験することが大切だと学ぶことができた。

3. 今後に向けて

海外研修を通じて、同学年はもちろん、他学年の学部生とも交流を持つことが出来たため、夏休み明けの大学生活がより豊かなものになった。また、ストックホルム大学の生徒のうち、一人が日本に留学しているとのことで、連絡を取り続けている。相手にとって日本語の勉強になるよう、相手から送られてきた日本語のテキストを、より自然な表現に入力して私が送り返し、そのうえで内容についての返事を送るという連絡の取り方を行っている。ストックホルム大学での交流の際は、英語を話すことに疲れてしまった私に対して、体調を気遣ってくれたり、日本語で話してくれるなど、優しく接してくれた。その恩返しができるよう、今後もこの連絡を大切にしていきたいと考えている。また、相手の希望により、海外研修参加者の数名とスカイツリーに案内する計画を立てている。海外研修で得た、ストックホルム大学の学生との出会いはもちろん、今までは接することのなかった学部生との出会いを大切にしていきたいと考えている。

海外研修を終えて

金崎 壮太

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

今回、コロナの関係でなくなっていた海外研修が復活するという話を聞いて海外研修そのものに興味を抱いたこと、福祉国家と言われているスウェーデンに実際に赴いて現地の福祉政策や考え方に触れる機会というのは社会に出てからでは難しく、学生のうちのこういう機会でしか味わうことができないと考えたことから今回の海外研修に参加しようと思った。しかし、私自身生まれて初めての海外に行くということであったこと、英語がまったくできないこと、食事も好き嫌が多く、食べることができるものがあるのかなど行くまでには多くの不安があったがそんな心配などほぼすることなく無事充実した8日間を送ることができた。8日間のスウェーデンでの生活を通じて感じたことは「日本と全然違う」だ。景観面についてはストックホルム市中心部の建物は高さが統一され、カラフルな色合いであった。中心部から少し離れた民家ではどこも大きな庭があり、リンゴの木などを育てたりしていた。人間性に関しても、自ら交流会に集まってくれた現地の大学生はもちろん、コンビニの店員や街中で全く知らない人に対して話かけたり、手を振ったりするとみんなすぐに笑顔で返してくれるくらい友好的であった。

2. 特に印象に残っているエピソード

3日目の現地の大学生との交流会と一緒に行動した4日目の自由行動だ。3日目では多くの学生と交流をし、4日目はその中で特に話が合って仲良くなった男子3人に街を案内してもらった。どちらの日でもみんな日本の文化や食べ物に興味を多く持ち、積極的に英語ができない私でもわかるような簡単な英語などで話しかけてくれた。スウェーデンでは公用語がスウェーデン語であるにもかかわらず、なぜ町の人もみんな流ちょうに英語がみんなできるのか聞いたところ、スウェーデンでは小学校2年生の時から英語の勉強が本格的に始めるからだと言っていたのが特に印象に残った。日本でも近年、小学校低学年から英語の授業を取り入れ始めているが多くて週に1、2回だと思う。もちろん日本語は「ひらがな」や「カタカナ」、「漢字」などとても難しい言語だと分かっているがそれでもこれからのグローバル社会のために英語教育に力を込めていくべきだなと感じた。

3. 今後に向けて

今回の海外研修を通して福祉の面だけではなく社会的な面といった面でも日本とは全く違うことを感じ取れた。日本と違う面において日本でもできることやスウェーデンの環境でしかできないことなどを自分たちで考え、取り入れることができるものを積極的に取り入れていくことがこれからの課題だと考える。反省点としては個人的反省だがもっと英語におけるコミュニケーションができるようになっていけばより深く詳しく情報やスウェーデン文化を知ることができたと感じた。

初めての海外での経験

瀧澤 優奈

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

スウェーデンでは子どもが第一に考えられているということを実感した。プレスクールの先生が一言目に「親が働けるために私たちはここにいます。」と述べたことに衝撃を受けた。プレスクールでは、子どもたちの考えによってカリキュラムを進めており、幼い頃から自己決定の尊重に重きを置いていることを学んだ。

一方で、福祉が手厚いとされるスウェーデンでも、日本と同じような課題があることも感じた。例えば、人手不足だ。高齢者のケアでは、高齢者施設を国が提供しているが、それだけでは足りず、家族がケアをしないと賄えない状況になっている。また、プレスクールや小中学校では1人の校長が2～4校を担当している。そして、都市開発の担当者は、この30年で格差が進んでいると述べていた。このようにスウェーデンでも、日本と同じような課題に直面しているという現状が見えた。

スウェーデンはトイレの数が少なく、ほとんどが男女共用で、それにとっても驚いた。また、日本はトイレの数が多し、衛生的に保たれているところが多いので、それは当たり前ではないことを実感した。

2. 特に印象に残っているエピソード

私は帰国の前日に38度の熱を出した。そのため、研修最終日は参加することができなかった。初めての海外だったし、まさか発熱するとは思っていなかったのも、とてもショックであり不安だった。しかし、たくさんの方々に助けられた。同室の先輩は、とても心配してくれ、親身になって看病して下さった。2年生の仲間たちは、おみやげの写真を送ってどれがいい？と聞いて代わりに買ってきてくれたり、風邪薬を分けてくれたり等々、たくさんお世話になった。みなさんの優しさにとても救われたし、感謝している。本当にありがとうございました。喉が痛すぎて、帰りの機内で飲んだオレンジジュースが喉に刺さったことは忘れられない。なんとか帰国できて本当に良かった。

3. 今後に向けて

この研修に参加しなければ出会わなかっただろう2年生や、先輩方と関わりを持つことができ、今も繋がりを持てていることがこの研修に参加して一番よかったことだと思う。私は集団行動が得意ではないし、初めての海外という慣れない環境でもあったので、不安と日々の疲労でいっぱいだったけれど、参加できて本当に良かった。集団行動も悪くない、みんなと一緒にいるのは楽しいと思えたことが今後の自分にとってプラスになると感じている。また、今後の大学での勉強では、今回学んだスウェーデンの福祉と比較しながら、考えや理解を深めていきたい。

海外研修を通して得たこと

飯室 遥香

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

私はこれまで海外へ行ったことがなく、この海外研修が初めての海外だった。初めての海外で不安も多かったが、人に恵まれ、自分が想像していたよりも順応能力が高く(笑)、友人たちと一緒にストックホルムを観光していた時に買ったチーズサンドウィッチのチーズだけを鳥に食べられるという事故があったものの、まるでテーマパークのような美しい街並み、街行く人たちの穏やかな雰囲気、仄かに香ってくる小麦の香り、目に映る何もかもが新鮮で、濃厚で楽しい一週間を過ごすことが出来た。お店の人や現地の学生たちに英語で話しかけるということにも挑戦し、人間的に少しでも成長できたような気がする。

もちろん観光だけではなく、行政オフィスや病院など、どの施設の方も専門的な内容を丁寧に説明してくださり、日本にいただけでは得ることが出来なかった考え方や知識を身につけられた。今年度は変則的に第一団と第二団と研修が分かれており、第一団では特に心理系の分野の施設訪問が多く、自分の興味ある分野で学ぶことが出来た。

2. 特に印象に残っているエピソード

特に印象に残っているのはストックホルム大学の学生たちと交流したことだ。人生で初めてザリガニを食べ(カニのような味がして美味しかった。海鮮系が苦手な私ですら食べることが出来た)、交流会のアクティビティで遊んだり、別日にストックホルム市内を案内してもらったりした。学生たちは日本語を専攻しているということもあり、日本文化に興味津々な学生たちが多く、お互いに好きな日本のアニメや漫画、音楽やバンドの話をし、楽しい時間を過ごせた。趣味の話題以外にも、お互い同じ大学生として普段どのように過ごしているのか、これまでどのような勉強をしてきたのかといった真面目な話をし、お互いの教育で良いところや問題点を話した。私は第二言語の英語学習が限界で、第三言語に選択した中国語の勉強は挫折したが、ストックホルムの学生たちは第三言語を高校までで学び、大学では第四言語まで学ぶ学生もいるという話や、大学までの進学が無償だけでなく、毎月大学からお金をもらっているという話を聞いて衝撃を受けた。

3. 今後に向けて

一番の反省点は、ギリギリまで行動しなかったせいで班ごとに行った事前学習では他の班員に任せて自分はほぼ何もしていないという事態に陥ってしまったことだ。また、現地の施設の人たちに積極的に質問をしたり、学生たちと会話したりするまで、人見知りなのもあって自分からではなく、他の人が発言してから、相手が話しかけてくれてから、といったように受け身になりがちだったように感じる。

これらの反省点から、今後社会人として生活していく上でも大切になってくる、計画性と主体性の二つを大切にしていきたいと思った。

海外研修を終えて

鷺谷 あかり

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

私はこの海外研修を通して、現地に赴き自分で体験することの大切さを学んだ。もともとこの海外研修に参加したいと思うようになったのは、インクルーシブ教育について授業で初めて知った際に、先生が海外と比較をしながら話をしてくれたことで、日本と海外ではそんなに福祉の質が違うのだろうかという疑問に思ったことがきっかけであった。事前学習でスウェーデンの福祉について深く調べてみると、確かに日本ではあまり充実していないと思われる制度や公共福祉の手厚さを感じた。しかし反面で現実味がなく、これほどまでに福祉が充実している理由はきっと税金の高さなのだろうと狭量になっていた。

実際にスウェーデンを訪れてみると、街の雰囲気や働いている人々の様子から、その国民性や文化の違いに着目するようになった。そして実際に視察先で沢山の専門家から話を聞くことで、人々が生活や労働の中で大事にしていることを、そこに住む人々の様子と共にしっかりと感じる事ができた。本やPCで情報を得るだけではなく、実際に人から話を聞くことで、現実味をもって感じられるのだと知り、海外のことに限らず、当事者から話を聞くことの大切さを学んだ。

2. 特に印象に残っているエピソード

印象に残っていることは、視察に行く先々でいつも飲み物やお菓子を用意してくれていたことである。また、交流会で現地の学生に「日本とスウェーデンは人への配慮を大事にしている点で似ている」と言われたことも寝耳に水であった。私は、日本は海外と比べ国民性が際立っていて、それゆえに福祉の妨げになっているのだと思っており、だからこそ海外の福祉をもっと知りたいと思っていた。だがそのためには、違いだけではなく共通点も知る必要があると気が付いた。現地の学生が言うように、日本とスウェーデンに共通する国民性があるのなら、なおさらスウェーデンの発展した福祉を積極的に日本は取り入れるべきだと感じた。研修の視察先すべてを通して、この学びに繋がったのである。

3. 今後に向けて

今回の研修で少し心残りだったことは、自分が特に興味のある分野の見学先と、そうでない見学先とで自分の知識量にかなりの差があったということである。そのせいで、せっかく施設の方が説明をしてくれているのに、自分に知識が無いせいで上手く理解ができなかったり、浅い質問しか出てこなかったりすることが多々あった。これではこの潤沢なプログラムを享受できていたとは言えない。もったいないことをしたと現地で後悔したことをよく覚えている。しかし普段自分から触れることのない分野も、今回の海外研修を機に自分の中で他人事ではないと意識をもてるようになったことは喜ばしいことである。この海外研修のおかげで、今まで興味の持てなかった分野の情報も目に留まるようになった。今後はさらに視野を広げて、積極的に知識を取り入れ学んでいきたい。

スウェーデン研修での気づきと今後の学習に向けて

柴田 佳

研修以前から北欧諸国の福祉に対する意欲的な姿勢は印象的であったが、今回の研修で、スウェーデンの取り組みを実際に見聞きし、改めて福祉先進国としての積極的な姿勢に驚かされた。また、国民たちの福祉に対する意識の高さも感じた研修であった。その他に、現地学生たちの語学力の高さと積極的な学びの姿勢は見習うべきだと感じた。

このように様々な学びがあった研修だが、特に印象的なことが2点ある。一つ目は、小学校の視察である。今回視察した小学校は、様々なタイプの問題を抱える児童を受け入れているため、通常よりもかなり手厚いサポートをしているが、そのサポートの充実度には驚かされた。例えば、移民の多い地域にあるこの小学校では、スウェーデン語を学ぶ上で、母国語も重視すべきという考えのもと、現在は25か国語に対応できるよう、市が教員を雇い、学校に配置している。この母国語を大切にし、生徒たちの多様な言語のニーズに合わせた取り組みは、日本ではなかなか見られないため、生徒たちを尊重した手厚いサポートに感銘を受けた。また、親や家族、地域に限らず、警察とも連携をしている点にも驚かされた。この連携は、子どもを捕まえる目的ではなく、警察が子どもたちにとって良いことをしたいという心持ちのもと、不登校の子どもなどへの対応をおこなっている。このように、様々な機関との連携をおこなっている小学校であるが、この根底には、自分が責任を負うものに集中すべきという考えがある。教師に仕事集中し、過労が問題となっている日本の教育現場において、自分の役割に集中し、分業する方法は参考になると思った。これらに加え、生徒たちの「学校が楽しい」という声も印象的だった。この声は、小学校の手厚いサポートや子どもたちを尊重する姿勢から生まれるのではないかと感じた。

二つ目は、権利を尊重する姿勢である。小児病棟では、手術や副作用の説明における人形の使用、本物の器具を使った遊びなど、子どもに治療内容を理解してもらうための工夫が多くなされている。また、プリスクールでは、子どもたちが興味のあるものを見つけられるような工夫や興味を示したものをカリキュラムに組み込むなど子どもを尊重する取り組みが多くなされていた。その他にも、介護をする家族や依存症、失業者など様々な人に対する市の手厚い支援やペットに関する法律など、様々な場面で権利を重視している国であると感じた。このような風潮が社会全体にあるため、社会的弱者を受け入れ、支えていく国民たちの姿勢が実現されているのではないかと感じた。

このように、今回の研修では、多くのことに気づかされ、充実した時間を過ごすことができた。また、研修期間中、かなり積極的な行動ができていたと感じたため、この積極性をこれからも継続したいと思う。これらに加え、研修中、課題となった英語力に磨きをかけ、さらに深い理解へと繋げるとともに、今回の学びを今後の学習に活かし、社会の力となる存在へと成長できるよう努力を続けたいと思う。

利用者の幸せを心から願い、支援を楽しむということ

助川 彩穂

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

まず全体的に、スウェーデンが日本とは全く違う考えや雰囲気を持っていることに、感銘を受けていた。日本のように、主張せず人と同じであることが良い、といったような消極的な考え方や雰囲気はなく、どこに行っても明るくフレンドリーな対応をされ、どこの研修先に行っても、「個人の自由な意思を尊重する」という考えが見受けられた。一番印象的だったのは、障害者向けの高校で働いている職員さんが、子どもに合った支援を行うのはとても楽しいと話していたことである。日本では、働くことに対してマイナスな情報も多く、「働くことが楽しい」という意見をあまり目にしていなかったのだが、日本と比べると考え方にあまり縛りがないように感じるスウェーデンでは、“利用者の為に働く”ことを純粋に楽しめているように感じ、それをとても理想的だと感じた。日本のように、同調圧力により抑えつけられる社会が当たり前ではないこと、一歩外に踏み出せば全く違う価値観に出会えることを、今回学ぶことが出来た。

2. 特に印象に残っているエピソード

自分は児童福祉に最も関心があるので、子どもに対する意思や気持ちの尊重についての話をプレスクールで聞いたことが特に印象に残っている。プレスクールでは、子どもに自分で考えさせる、やってみさせる、というように子どもの主体性を大事にしているという。また、“OK”と言わなければ同意はないと考え、助けていいか、ハグをしていいかさえも本人に確認をとるそうだ。小さな頃から意思を尊重してもらえれば、自分の気持ちを大切にできる大人になるだろうと感じ、相手を尊重することの大切さをとても強く実感した。また、小児病院では子どもの手術時の心の負担を軽減する取り組みがされており、小学校には人との付き合い方を教える”社会の先生“という仕事があった。視察先の至る所から、“子どもの為に”を思う気持ちを感じ、自分もこんな風に子どもの幸せを願える大人になりたいと、思わせられる時間だった。

3. 今後に向けて

日本とは違う考えを知れたので、周囲に流されず自分を尊重する、人と自分は違って当たり前と考える、我慢せず意見を言う、など、まずは自分自身が、自由で軽やかな心作りをしていきたいと考えている。そして対人面では、“相手の気持ち、意思を最優先”に利用者本位の支援を行い、支援者が支援に純粋なやりがいを感じられることが双方にとってとても理想的だと感じたので、自分が福祉分野、児童福祉分野に携わる時は、必ず“相手の意思を尊重する”という考えを持ち続けていきたいと強く思う。今回の研修がとても良い経験になったので、後輩にはこの研修に行くことをとてもオススメする。

食文化に触れた一週間

渡辺 瑠華

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

スウェーデンの魅力をたくさん発見できた海外研修であった。いくら事前学習をしても、スウェーデンのガイドブックを見ても、行くまでは実感が湧かなかった。しかし実際に行ってみると、素敵な街並みや人、文化に触れてたくさんの刺激を受けることができた。視察先に行つて勉強した後、ジブリ映画「魔女の宅急便」の舞台となったガムラストンと呼ばれる旧市街に行ったり、ストックホルムにあるIKEAの本店に行ってみたり、勉強の後は観光をしてスウェーデンを満喫することができた。

2. 特に印象に残っているエピソード

福祉はもちろんだが、スウェーデンという国の歴史や文化、特に食文化を実際に体験できたことが印象に残っている。甘い物と一緒にコーヒーを楽しむ、FIKA（フィーカ）の文化がスウェーデンにはあり、スウェーデンの人々は仕事の合間など、日常的にFIKAの時間をもうけているという。実際に視察先では、シナモンロールなどの甘いパンやクッキー、そしてコーヒー・紅茶が用意されていた。フィーカタイムを取ることは、仕事にメリハリが生まれ効率よく質の高い仕事につながると私は思った。オンとオフを重視し、頭をリフレッシュできるフィーカという文化に感銘を受け、日本に帰ってから大学の課題を行う際はフィーカタイムを取り入れている。また、スウェーデンの大学生と交流した際に食べたザリガニや、スウェーデンのファーストフードであるケバブピザも印象に残っている。スウェーデンでは、夏になると「ザリガニパーティー」が行われ、家族や友人と集まってお酒やジュースとともにザリガニを楽しむ文化がある。事前学習で聞いたときは驚いたが、海外研修がちょうど夏だったので、「ザリガニパーティー」を実際に体験できて嬉しかったし感動した。味はエビに似ていて、中身の肉は少なく汁を楽しむと大学生から教えてもらった。そして、スウェーデンのソウルフードであるケバブピザが、海外研修において食べたものの中で一番美味しかった。イタリアからやってきたピザと、トルコからやってきたケバブが融合されて、スウェーデンでケバブピザが生まれたという。

3. 今後に向けて

今回の海外研修では、時差ボケがひどかったことに加え、終盤は体調が悪くなってしまったので、体調管理における反省を挙げたい。自分が思っていたよりもスウェーデンは寒く、もう少し暖かい服を持っていく必要があった。今まで海外に行く機会が多く無かったので、時差ボケや気温差に体が追いついていなかった。今回の反省を生かして、今後海外に行く際は入念な下調べと準備を行いたい。

スウェーデンで学んだこと

志牟田 美佳

1. 海外研修を通しての感想や学び

海外研修を通して学んだことは、スウェーデンは「個人」と「多様さ」を尊重する価値観が社会の基盤にあることだ。自立や意思決定権など個人の権利を重んじる考えが、教育や福祉体系の基本方針として根底にある。それらを意識づけるために、幼い頃から自身の意見発表や決定をする練習をおこなっており、ハンディキャップがある人でも同様に行えるように、訓練を行っている。また、社会活躍に対する価値観でも、スウェーデンでは性別や年齢という括りにこだわらず、一人の人間として考えていることがうかがえた。これは研修先の学校長の先生や行政機関の部門を引っ張っていくリーダー、企業の運営・人事の責任者などを若い世代と言われる年齢の方々や女性が務めていることから感じたことである。私たちに、自身の仕事や研修先に関する説明をしてくださる際も、堂々とお話をしてくださる姿が印象に残っている。上記のようなリーダーの下に様々なスタッフがついていく体系で組織が成り立ち、互いにしっかりと自分の意見や考えを伝え合う様子から、尊重しあい協働している様子を目の当たりにした。

2. 特に印象に残っているエピソード

研修先の市の行政機関で高齢者、障害者福祉のお話を伺った。その際にこれから現代的になるように作る施設には、日本のトイレを導入することを考えているとおっしゃっていた。スウェーデンは、その充実した福祉政策で非常に勉強になる点が多い国であるが、このように日本が特化している技術をご存知であることと、検討されている点に、嬉しさを覚えたと同時に、非常に印象的であった。

3. 今後に向けて

スウェーデンに渡航して感じたことは、自身の知識の浅さであった。スウェーデンや日本に関する情報や、英語やスウェーデン語の知識に関しても、調べておくべきだったと感ずることが多かった。渡航前の事前学習では、自分自身の関心のあるテーマを中心に調べたため、実際に現地に赴くことで得られる情報も多かった。新しい学びとも言えるが、自分自身の勉強不足を感じた機会でもあった。また現地の大学生の中では、スウェーデン語に加えて英語やそれ以外の第三言語を話せる方も多く、日本語を面白そうだから勉強している方もおり、現地の大学生の言語力もさることながら、新たな言語を習得しようと勉強欲を持っている姿に感銘を受けた。自身の日々を振り返ってみると、学部での勉強や語学学習を通して、自分から勉強したくて始めたものが義務感になってしまっているのを実感した。やらされているではなく、自身の能動的に取り組む姿勢を改めて意識して、日々の勉強を行おうと反省した。また、現地の大学生が母国語のスウェーデン語ではなく、英語で流暢に我々とコミュニケーションを取る姿を見て、語学と日々の勉強、間違いを恐れずに挑戦する姿勢を今後の日々の中で意識したいと思う。

海外研修を通しての学び

古山 なつ

1. 海外研修全体を通して

私は、大学に入学する前に海外研修の存在を知り、入学したらぜひ参加したいと考えていた。昨年度はコロナ禍ということで海外研修が中止になり、自分はもう参加できないかもしれないと不安に思っていたため、今年度、3年生として海外研修に参加することができて、とても嬉しかった。私は、海外に行くのは今回が初めてであり、パスポートを取得したり荷物の準備をしたりするところからわからないことだらけで、不安を多く抱えていた。しかし、いざスウェーデンに行ってみると、困ったことがあっても意外となんとかなるのだと感じた。今まで海外に行くことはとてもハードルの高いことだと感じていた自分が、そういった感覚を持つことができるようになったことは、今回の研修で得られた大きな収穫だと思った。

2. 特に印象に残っているエピソード

研修先ごとに初めて知ることが多くあり、すべて貴重な学びであったが、その中で特に印象に残っているのは、大学病院の小児科についてだ。病院を特別なところとするのではなく、プリスクールや自分の家と同じような環境にするようにしているというお話を聞いた後、実際には子どもたちが遊ぶ部屋を見学させていただいた。そこには、ゲームや卓球台が置いてあり、壁には絵やポスター、スポーツのユニフォームなどが飾ってあり、病院の中にいるということを忘れてしまいそうなくらい温かい雰囲気の部屋であった。病気で入院していても、できる限り他の子どもと同じような普通の生活を送れるように配慮がされていることがとても印象に残った。また、病気の子どもに、その病気のことや治療のことを、遊びを通して理解させる取り組みについての説明を聞き、病気のことや治療のことを子どもには詳細に知らせないことが多い日本とは全然違うのだと驚いた。日本では、小さな子どもに病気や治療の詳細を知らせることはかわいそうだと思われがちだが、スウェーデンでは、これから自分にどんなことが起こるのかを事前に知って心の準備をした方が怖さが減るという考えのもとに、この取り組みが行われていた。がんにかかった人形、尿カテーテルの人形、実際の注射器、怒りを表現する恐竜など、多彩な道具を使い、遊びを通して病気や治療への理解を促すことは、病気の子どもの精神的苦痛の軽減のために非常に有効であると感じた。

3. 今後に向けて

行政オフィスの職員の方と昼食をご一緒した際に、日本の移民問題について質問され、うまく答えることができなかったため、日本のことについてもよく知っていこうと思う。

海外研修を終えて

近藤 映月

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

入学以前より海外研修のことを認識はしていたが、自分たちの代で実施されることはないと考えていたため参加者募集のガイダンスの告知を見たときには驚いた。3年の夏休みということもあって参加は少し迷ったが、初めて海外に行くにはとても恵まれた機会に思え貯金があったため軽い気持ちで参加を決めた。終わってから考えてみても、現地に行かなければわからない様々なものを吸収できたと思うし、個人的にかなり反省とそこからの学びもあり、自分にとっては参加費以上に色々な得るものがあったので参加を決めてよかったと思う。

町並みがどこを見ても海外（当たり前）でどこに行っても何をしても学びがあり楽しかった。夜は自由時間もあるため行きたいところと閉館時間などを調べていれば、観光する余裕もある程度あった。研修に行く前は食事についてかなり心配していたが、私にはスウェーデンの食事も機内食も合っていて楽しむことができた。

2. 特に印象に残っているエピソード

プレスクールで伺ったことに、子どもが自身も他人も大切にすることを学べるように、大人が意識して幼少期から接することの重要性などがあった。他にも色々あるが子どもに関わる訪問先で学んだことは全体的に、私が心理実習先の児童養護施設で学んだことにかなり近いように思えた。子どもの健康的な発達を考えるなら、日本でもより広く教えられるべき内容がたくさんあるように感じた。

3. 今後に向けて

研修先で伺ったお話はどれも興味深く、もっと知りたいことばかりであったが自分の事前学習が全然足りていなくて、せっかく現地で直接質問できる機会があったのに適切に活かせなかった。日本でも学べるスウェーデンの制度などの知識が全然頭に入っていないで深い理解ができないところが多かったのも、本当にもったいないことをしたと思う。英語について、私は会話をしたいという気持ちだけはあったが自信がなく、話すたびに「英語が下手でごめんなさい」みたいなことを言って、毎回相手に「自分も日本語話せないから大丈夫だよ」みたいな返事をもらっていた。よくわからない自分の申し訳無さを話すよりも、もっと勢いでコミュニケーションを取りたいという態度を示せていたら、関わった方たちは皆さん優しいのでより楽しい時間になったと思う。次英語を話すときには楽しめるようにしたい。研修全体を通して自分が未熟だと感じる事が多く、色々反省するいい機会になったため、得られたものは全て将来に活かしていけたらと思う！

スウェーデン研修個人報告

有賀 翼

一週間の滞在で様々な施設を訪問させていただき、そこでの専門家や施設職員の方の話の中で、福祉制度や取り組み、基となる考え方など、多くの点において日本との違いを肌で実感することができた。特に児童関連の施設の考え方や重きを置いていることに、大きな差があると感じた。スウェーデンの小児科病棟やプレスクール等の児童施設では、児童が何をしたいのかという“本人の意思”を尊重している。小児科病棟では、保護者だけでなく児童本人にも病気の症状や手術の内容、そのリスク等をイラストやぬいぐるみを用いて説明する。それは、子どもにも自身の病気のことを知る権利があり、当然知るべきであると考えているからだ。子どもだから分からないと決めつけることなく、本人にも理解をしてもらうような工夫をしている。日本では、手術を要するような児童には、保護者に向けて病気のことを説明するような印象があるため、このようなスウェーデンの考え方は子どものことを大切にしている良いと感じた。

また、スウェーデンの公共交通機関の利便性には驚かされた。日本では、たとえ日本語で案内看板があっても、目的地に辿り着くためには、どの鉄道やバスに乗ったら良いのか分かりづらく不便に感じることも多い。しかし、スウェーデンでは一週間の滞在中、一度も移動に関して不便に感じることはなかった。一つに路線の多寡によるものだと考えられる。東京の都市部では駅が密集し、どの場所も駅から近いという良い点がある反面で、路線図は非常に分かりづらい。他にストックホルム市内の鉄道、地下鉄、バス、フェリーのすべてがSLという会社によって行政の支援を受けながら運営されていることも要因として挙げられる。SLアクセスカードの7daysパスを一度スマホから買ってしまえば、表示されるQRコードを改札で提示するだけで市内すべての公共交通を利用することができる。また同アプリ内から経路の検索をしたりgoogle mapを開いたりすることもできる。移動に関することはすべて一つのアプリ内で完結していて、初めて乗る電車やバスでも困ることがなかった。

スウェーデンでは日本よりもキャッシュレス化が進んでおり、どんな場所でもクレジットカードで支払いができるようになっていたことが快適だと感じた。支払い時のレートで、日本円で引き落とされるため、値段がわかりやすく会計時に戸惑うことがなかった。もし支払い時に現金を使う場合、普段使いなれていない外貨では、すぐに出すことができず紙幣ばかりを出してしまい硬貨が次々と溜まってしまっていたかもしれない。研修先での学習だけでなく、スウェーデン大学の学生と交流したり、観光を楽しんだりしながら、スウェーデンの地域性や文化を肌で触れることができ、とても貴重な経験となった。

初北欧

筒井 くるみ

1. 海外研修全体を通しての学び

私がこの海外研修への参加を希望したのは、私がこれから心理学を学んでいくにあたって自分に何かしらの影響があると考えたからである。福祉国家として名高く税金の高さは社会保障に回され、日本メディアお得意の自国自虐によってどこか日本の福祉に対していい感情ばかり抱くことはできていなかった。そんな私はこの研修で学べることにに対する期待のハードルがそれは高くなってしまっていた。

そして私がこの研修で学んだことは、福祉は制度だけでどうにかなるものではないということである。研修を思い返してみても感じるのは、もっぱらスウェーデンという国の文化だからこそ成り立つものがある、である。

スウェーデンにはフィーカという文化があり、これは仕事中にもコーヒーやお茶、お菓子を楽しむ文化であり、まずここから違う。日本でやろうものなら周りからどう思われるかは想像に難くない。私も研修でさまざまな施設に訪問し、何倍もの紅茶を頂いたが話を聞いている最中にカップに手を伸ばすのはかなり躊躇った。またスウェーデン観光ができるのは1日だけで忙しくなるだろうと思っていたが、退勤時間の関係か研修の後にスウェーデンの街並みを楽しむ時間がとれたのは思わぬ幸이었다。このようにスウェーデンではプライベートと仕事のバランスや考え方が日本と大きく異なりスウェーデンならではの基盤があるからこそ成り立つ福祉制度がいきているのだと考えた。

2. 特に印象に残っているエピソード

さまざまなルーツを持つ移民を多く受け入れている学校において聞いた、「いじめがあるのは当たり前」という言葉である。いじめは確かに悪である。しかし日本では悪が故にいじめが起きないように排除されたり悪評になるからと隠蔽されていたりしているが、スウェーデンでは悪だと認めおきた後にどうするかを重視している。私はこれをイジメとの共存と考えた。もちろんいじめが起きないことが最善だとも思うが、起きた事を認めその後でどうするかと思考を切り替えることも支援者としては重要なことではないかとも思った。

3. 今後に向けて

今回感じたのは福祉方面への知識不足である。将来心理士を目指す者として、社会福祉士などといった福祉関係の職種とは協力すべきであり、専門分野だからと任せてしまうのではなく自らもある程度の知識を持っていた方が適切な支援に繋げやすいのではないかと考えた。これを反省、課題として今後も励んでいきたい。

海外研修を終えて

土肥 ほの花

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

私は、在学中に海外研修が復活するなんて思いもしなかったのに、自分が海外研修に行けることになったと知った時大変驚いた。大学生の時間があるときに海外に行きたいと考えてはいたが、実際計画をたてるとなると面倒だという思いが勝り、今まで行けずにいた。そのため、宿泊場所やフライトの時間など面倒だと考えていた部分をすべてやっていただけるこの海外研修は私にとって魅力的であったし、この機会を逃すと海外に行かないまま大学生活を終えることになる焦りもあって、海外研修に参加することにした。海外研修全体は充実したものであったが、3日目に熱がでてからずっと体調が万全ではなく、一日自由行動の日にもどこにも行けなかったことに悔いが残っている。出発前に自分の英語会話能力を心配していたが、スウェーデンの学生の方が分かりやすい英語を話してくれて、私が話すところどころ間違った英語も理解してくれる優しい方ばかりだったので、無事会話ができて安心した。この海外研修では楽しい経験とともに多くの知識や学びを得られたので本当に参加してよかったと感じた。

2. 特に印象に残っているエピソード

私は、カロリンスカ大学病院での研修が一番印象に残っている。自分が幼いころから入院生活を繰り返していることもあって、日本とスウェーデンでの対応の違いや小児病棟の違いに興味を抱いていたので、小児病棟の見学を研修の中で特に楽しみにしていた。実際、広いプレイルームや体への刺激が少ないヒーリングルームのような部屋、遊具付きの庭など日本の小児病棟、少なからず私が入院していたところ、にはない設備がたくさん備わっていたり、おもちゃのMRIや点滴・胃ろうがされている人形が用意されており、小児患者が治療を怖がらないよう工夫がされていたりと、子どもの権利を保障するように病棟が作られているところに感動した。また、病気や治療について偽りのない情報を子どもの認知発達レベルに合わせて提供することを知り、子ども自身が納得した上で治療を行うことができるから、子どもが病院やスタッフに対して不信感を抱くことなく、積極的な治療を行うことに繋がっているのだと考えた。日本では幼いと親の意見だけで治療が進められることがあるので、この子どもの意思を尊重するやり方が日本でももっと普及されてほしいと感じた。カロリンスカ大学病院での研修は、時間が足りないと感じたくらい私にとって充実したものであった。

3. 今後に向けて

研修を受けているときに、日本の福祉政策について質問されても自信をもって回答できなかったことが今回の研修での反省点である。海外のことについて学ぶ前にもっと日本についての知識を入れておかなければ、比較することができない。今後は日本の福祉政策についての知識を深めていきたいと感じた。

スウェーデン現地を訪問して

平野 暖佳

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

今までスウェーデンは福祉が充実しており適切に休暇をとる暮らしやすさのイメージが 大きかったが、実際に訪れてみると気候の厳しさを大きく感じた。空気が乾燥しており、 冬は午後 2 時には日が落ちて真っ暗になるという。事前学習でスウェーデンのうつ病の発症率が高いことを知りなぜか疑問に感じていたが、冬季に暗い時間が長いことなど気候が関連するのではないかと感じた。この研修で日本とは異なる生活を体験できたことは非常に良い財産になったと思う。さらに、スウェーデンでの働き方を見て「無理をしない効率の良さ」を目の当たりにした。例えばスウェーデンでは日本のように残業をすることは少なく、家族との時間を大切にするため夕食の時間には帰宅する場合が多い、また機関によるとは思うが紅茶を飲みながら心身共にリラックスした状態で会議が行われるなど、形式にとらわれることなく、人間らしさを大切にしながら働く様子が見られた。

2. 特に印象に残っているエピソード

私はカロリンスカ大学病院での研修が特に印象に残っている。病院では疾患の後ろにある子ども自身を見ることを大切にしており、加えてスウェーデンでは子どもが疾患に対する情報を受け取る権利があることを学んだ。具体的に行っている取り組みの一つは、治療 方法を人形や絵本を用いてわかりやすく説明することで、実際に使用する道具を用いて人 形に治療する場面を見せたり、血液のようなものを作り採血の様子を見せるなどして子どもがなるべく治療に参加できるような工夫がなされている様子を視察することができた。日本ではあまり聞いたことがない取り組みであったため、とても感銘を受けた。スウェー デンでは幼少期から子どもの意思を重視していることが小児病院を始め、プレスクールなど様々な場所での取り組みから見受けられた。小さな子どもからお年寄りまで皆が自分の 思いを大切にし、自己決定する力が養われていると感じた。

3. 今後に向けて

スウェーデンの暮らしを知り、日本の働き方を見直していく必要があると考えた。ワー ク・ライフ・バランスの乱れはウェルビーイングに良くない影響を及ぼすため、多様性へと変化しつつある現代では、これまでの固定概念にとらわれず自分に合った生活様式を模索していくことが必要であると思う。将来私は対人援助職に就きたいと考えているが、日本では予防的な面で、仕事に追われ頑張りがすぎないこと、休息の取り方などを普及していく必要があると考える。現代はSNSが普及しているため、それらの媒体を通して予防的知識が広まり、日本の働き方に関する固定概念が少しずつ緩まって、多様な考え方の社会となれば良いと思う。

海外研修を終えて

小泓 詩織

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

今回の海外研修は非常に豊かで充実したものであった。現地の人々と交流する中で、彼らの生活様式や価値観を知ることができ、それが自分の視点を広げるきっかけとなった。また、言葉や習慣の違いからくるコミュニケーションの工夫も学ぶことができた。この経験は私にとって、新たな視野を開き、成長と学びの機会となった。研修中に訪れた施設も非常に印象的だった。福祉国家と呼ばれるスウェーデンの進んだ施設や風景、歴史的な場所を観察し、革新的な制度などの話を聞きながら日本の施設と比較したことで、日本が抱える課題や、何がより良い未来につながるかを考えることができた。これは、持続可能な未来への理解を深め、自らの行動に対する責任を感じるきっかけとなった。

2. 特に印象に残っているエピソード

ストックホルム大学の学生達との交流会が特に印象に残っている。私は交流会の係を務め、事前に準備していたプレゼンテーションや、企画を実行した。初対面の母国語の違う学生たちの前で発表は緊張したが、準備に力を入れた分達成感を感じた。日本の文化を現地の学生たちに体験してもらう時間では、私の班は折り紙を担当した。折り紙の折り方を教える際、説明書通りに教えても伝わらないことが多く、自分なりに初めて折る人でも理解しやすいような言葉を選んで教えることが難しかった。そのような困難を感じながらも、学生たちはにこやかに話しかけてくれたため、コミュニケーションをとることは楽しかった。このように困難や挑戦に直面することで成長の機会が生まれた。これは将来のキャリアや個人的な挑戦において、前向きな姿勢を維持する助けとなると感じる。交流会は単なるイベントではなく、自己成長と学びの場となった。

3. 今後に向けて

今回の研修での反省点は、積極的なコミュニケーションをとることが出来なかったことである。行動の時間に学生が街を案内してくれた際、学生が話しかけてくれたが、私は自分の中で何かを言葉にできなかった。交流会では、コミュニケーションをとることの楽しさを実感したが、この時は自分の英語力への自信のなさや、消極的な性格が出てしまった。このような機会はなかなかないにもかかわらず、上手くコミュニケーションをとることができず、後悔している。今後はもっと積極的に声をかけ、他者と交流することに努めたいと考えている。遠慮せずに質問をし、自分の考えや感じたことを率直に表現することで、より深い関係が築けると思う。

海外研修を終えて

高橋 和愛

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

私が海外研修に参加しようと思ったきっかけはスウェーデンに行ってみたくらいという単純なきっかけだった。また、海外研修でしか学べない、福祉、地域づくりそして心理について幸福度ランキングで毎年高い順位をつけているスウェーデンの秘訣を学ぶ貴重な機会であったため応募した。研修を通して学んだのが小さいことでも問題に対して真摯に向き合っているということであった。一人ひとり違うバックグラウンドを持っており、困っている問題や要望も違う。周りとは違うからという理由で問題をないがしろにしたりはしないというのは個性を大事にしているからこそであると感じた。例えば、プリスクールは入園する日がみんな違い、慣れるまでは親と通う。新しい環境になれる子と苦手な子がいても安心するまで時間をかけられるのは本人の気持ちを優先して考えていなければできないことであると感じた。

2. 特に印象に残っているエピソード

私が特に印象に残っているエピソードは2つある。1つ目はスウェーデンでは臨床心理士が薬の処方をする権限があるということだった。医師は診断することも決めることもできず、軽度、中度の病気であれば臨床心理士が治療を行うという。治療を受けるために医師の紹介は必要ない。スウェーデンでは、医学部と臨床心理士になるプログラムに入るのが難しいという。そのため成績が良くないと入れず、臨床心理士は医師と同等の権限があり、治療を任せられている。日本では医師が処方、臨床心理士がカウンセリングと役割が分かれている。薬の処方とカウンセリングを臨床心理士が行うことで回数を重ねていくなかで薬の相談や調整しながらできるというのは大きな強みだと思う。

もう1つは小中学校に訪問した際、ある生徒からなぜ日本では制服を着るのかと質問をされたことだ。この質問は私がアメリカに住んでいたときにも聞かれたことがあった。この質問をされたときになんて答えればいいのか分からなかった。スウェーデンの人は制服を着ることに対してどのように思っているのかを聞くことはできなかったため一つ心残りではあるが、制服の印象が強いのはスウェーデンも同じで驚いた。

3. 今後に向けて

今回の研修を通して感じた反省はもっといろんな人に話しかければよかったということだった。研修の場面での分からないことや気になること以外にも街中でなにか困ったときに現地の人に聞く、ストックホルム大学の学生に気軽に話しかけるなど久しぶりに英語を話す機会であったため、もっと英語を話せばよかったと思った。

海外研修



2023

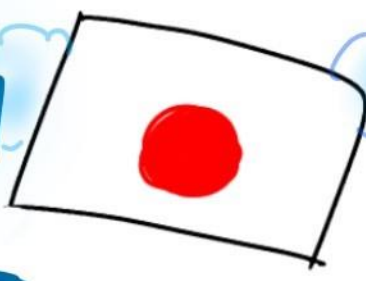
-7日間の記録-



8/26 ~ 9/3



Day 1



Tokyo to Stockholm

... 東京 → ストックホルムの道のり ...



出国前...

羽田空港に集合!



〜ドバイ
経由〜



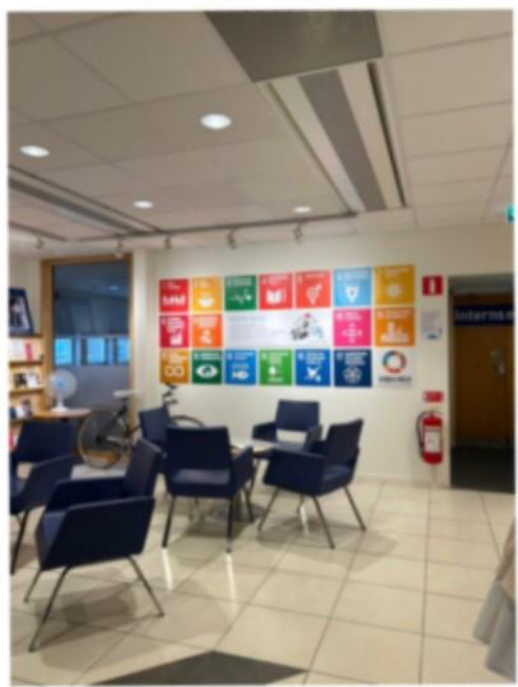
スウェーデンに

到着

フライトお疲れ様でした



Day 2 8/28
☆—初の視察先！—☆



入ってすぐ、SDGSの文字が！



研修後初の昼食🍴

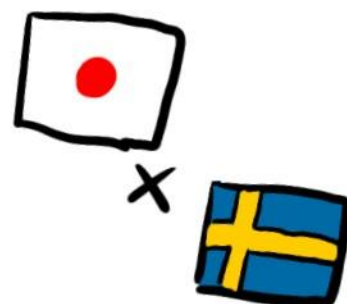


午後には
プレスクールへ！
沢山の子どもたち
と出会いました♡





8/29 Day 3



4回目 自由行動!

美術鑑賞



セシブな己人

交通機関もお手の物!



スキャンセン



動物もいっぱい!



大きな熊と記念撮影!



学生たちと合流!

ストックホルム宮殿
ドーン!!



みんなでごはん

ゴージャスな
雰囲気





ハンマルビー・
ショースタッド



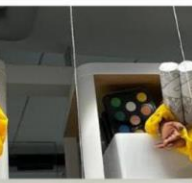
5日目

電車待ち



お昼は小学校の給食頂きました！

とても素敵な場所でした♡



店内はフотスポットが
いっぱい！



IKEA本店



マックにも
行きました！

2人は老舗のミートボール食べに行きました！



zzz



DAY 6



研修先のオフィスにて...
広々として
開放的な
空間でした!

みんなで作って
ほい 4-ス 

お昼ごはんは 
スリッシュをいただきました!



リ帰りは電車!



Day 7

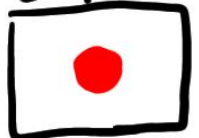
Sweden



Dubai



Japan

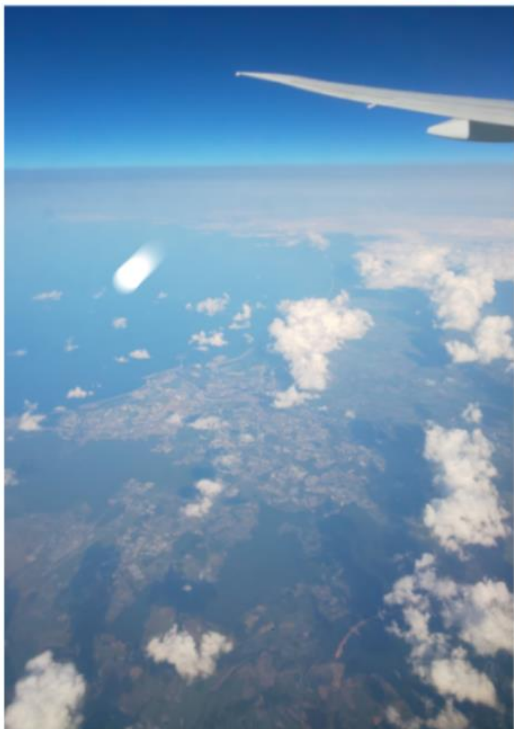


—最終日&帰国—



相棒(?)と帰国 出発前に観光!

和気あいあい



さようなら. ストックホルム



機内食で
皆満腹

先生お二人の
頼もしい背中
この後事件が...



権利擁護の奥深さ

引率教員 伊藤 正子

今年度、ついに4年ぶりに海外研修を実施することができました。今回の研修は、新型コロナウイルス（COVID-19）感染症拡大、ロシアによるウクライナ侵攻、原油高騰などの影響を大きく受け、これまでとは異なる方法となったことがいくつかありました。ここでは、主なものを3つあげたいと思います。

1つめは、オンラインの活用。これによりSQCのEmilさんのオリエンテーションがリアルタイムで実施可能となりました。2つめは、グローバル通信とLINEの普及。これにより全員のグループLINEを作成、緊急時のみならず、随時必要に応じて相談ができ、引率教員としても安心できました。そして3つ目は、現地の移動手段を公共交通機関に変えたこと。公共交通機関が乗り放題になるSLアクセスカードはバス、地下鉄、トラム、そして島々を繋ぐ船に乗り放題で、自分の足で歩いて観光しストックホルムの街の隅々や日常を肌で感じ、便利で楽で安全なバスよりも刺激的で有意義な日々となったと思います。

私は、2006年に1回目の引率を担当しました。その時は、福祉・政治業界で女性が活躍する姿、育児休業をとり子どもと遊ぶ父親の姿をみてジェンダー平等先進国を実感。何より個の尊重という福祉思想が現場スタッフのケアに浸透されていることに深く感銘を受けました。今回はおおよそのイメージがあるつもりでしたが、それは見事に覆されました。

特に今回印象強かったのは子どもに対する施策でした。子ども病院では「病人」ではなく一人の「子ども」として遊びや保護者との関係が時空間ともに保障され、治療法を理解し、積極的に治療を受けるために情報をわかりやすく伝えられていたり、移民の多い小学校では第2言語として25カ国語の先生が配置されていたり、非行やいじめに対して早い段階で対応すべく、身近で安全な警護者としての警察官が学校に配置されていました。

この背景には2020年に子どもの権利条約が法定化されたことがあります。各現場で子どもを個人として尊重する価値観が徹底して実践されていることを目の当たりにしました。もちろん「言うは易し行うは難し」で、スウェーデンの方々も悩みながらだと仰っていましたが、なおも人権を尊重する社会として前進しようとし続けるスウェーデン人の気高さ、哲学、社会の成熟をつくづく感じさせられた研修でした。

これも一重にEmilさんが研修先を吟味して繋げてくださったおかげであり、また現地スタッフ高橋さんの帯同、そしてツムラーレスタッフによる出入国サポート等により、安全で有意義な研修となったことに心から感謝を申し上げます。

今回の経験が、参加した皆さんがさらに関心を広げ、学びを深めていかれる糧となることを心から願い、期待しています。

最後にもうひとつ「研修」を受けました

引率教員 望月 聡

2019年以来4年ぶりの現代福祉学部の海外研修、行ってまいりました（個人的にも、2019年夏にベトナム・カンボジア旅行以来の海外でした）。COVID-19の流行によりずっと中止となっており、教授会では「オンライン研修」の可能性も議論されたこともありましたが、やはり現地での視察・体験的な学びは貴重です。メンバーの学生諸君と一緒に、スウェーデンにおける社会福祉・地域づくり・臨床心理について、大いに学んでことができました。この報告書のとおりです。とりわけこのA団は臨床心理学科の学生率が高かったのですが、臨床心理に関するところでは、資格を得るまでにどのように何を学んできたのか説明を受けたり、境界性パーソナリティ障害患者に対するDBT（dialectical behavioral therapy：弁証法的行動療法）に取り組む心理士や、またオンラインカウンセリングの会社を立ち上げた心理士の先生の専門的なお話などもうかがって、日本との違いを感じることができたと思います。

酷暑の東京から、涼しすぎる（雨の日は寒いくらいの）ストックホルム、スケジュール的にも充実した研修で、体調を崩す人もいましたが、みなが無事に帰国できほっとしております。伊藤先生（先生はずっと元気はつらつでした）の細やかなご配慮に深く感謝します。

そんななか、いちばん「帰国できなかったかもしれない」人物が、この私です。ストックホルムからドバイ乗り継ぎで成田に向かう途中、ドバイ空港内で警察官ふたりに声をかけられ、別室に連れて行かれ10分ほど事情聴取されました。原因はこの「旗」（レインボーフラッグ）、メンバーがはぐれないようにとの伊藤先生のご発案で、私がこの旗を掲げながら歩いていたことによります（写真は伊藤先生からいただきました）。旗はその場で没収されてしまいました。日本ではLGBTへの理解が深まっていますが、国によっては逮捕され刑罰の対象になるところもまだあるのです。（これは“釈放”されてから調べてみてわかったのですが…）こういう、国による違いというのは現場での実体験がないとなかなか実感できないものです。成田行きの便に乗る前に、メンバーのみなさんにはこのことを伝え、最後にもうひとつプラスアルファの「研修」を受けていただきました。

